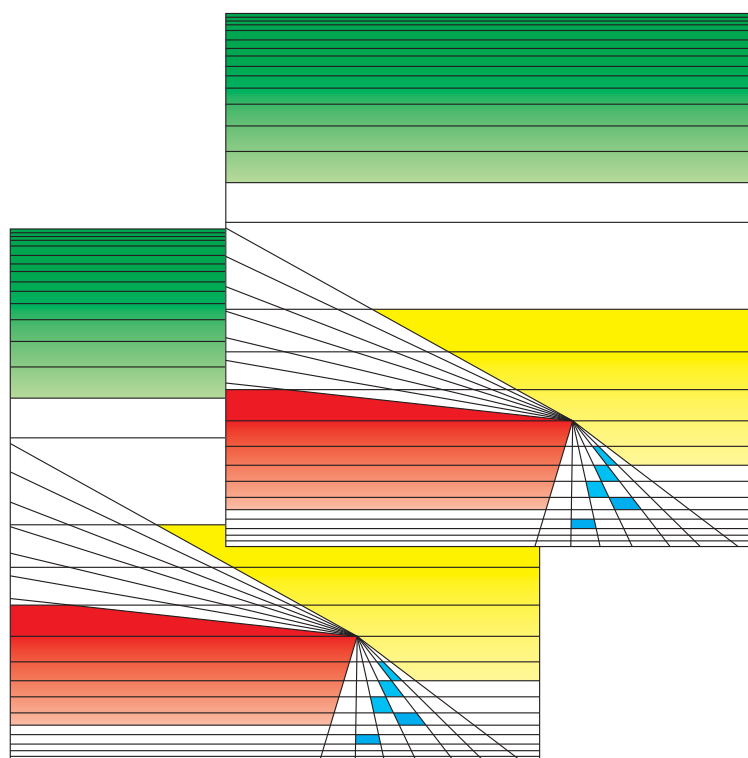


自治権
いばらき

132
2019.3



公益社団法人 茨城県地方自治研究センター



もくじ CONTENTS

2018年度茨城県労働者福祉協議会 勤労者福祉研究集会講演録

「子どもの貧困 私たちにできること」

社会活動家・法政大学教授 湯浅 誠 1

【資料】 29

子ども食堂、フードバンク、学童保育に関する情報掲載にあたって..... 35

「茨城県内こども食道実態調査報告書」（注1） 37

「茨城県内NPOセンター・コモンズとは」（注2） 51

「子ども食堂が申請できる助成金一覧」（注1） 60

「子ども食堂に関する参考文献一覧」（注1） 61

（注1） いばらきNPOセンターコモンズ ホームページより

（注2） コモンズ・大野事務局長セミナー資料（東海村にて開催）

「子どもの貧困 私たちにできること」

社会活動家・法政大学教授 湯浅 誠

こんにちは。湯浅といいます。よろしくお願いします。

話したいことは、子どもの貧困というテーマなのですが、構えはちょっと大きめにとっておきたいということで、4 つほど最初に伏線を申し上げたいと思います。

一つは、まず、SDGs（持続可能な開発目標）です。今年はリーマンショックから 10 年という年、そして平成の最後の年ということになりますから、私もしばしばリーマンショックから 10 年をどう振り返るのかとか、平成の 30 年をどう振り返るのかとか、いろいろな人に、いろいろメディアに聞かれて考えてきました。

そんなことを考えてくると、今から言うような伏線が絡んでくるのではないかなと思っていますので、ちょっとその話をします。

まず SDGs ですが、SDGs の生みの親はリーマンショックです。労働行政のトップにおられた村木厚子さんとはよくお話をします。彼女が非常に印象的なこととして語ってくれていたのが、彼女は、あの頃はもう局長とか統括官とか次官とかやっていたから、大臣のお付きでよく G8 とか G20 とか国際会議に行かれていたのです。そのときに、あのリーマンショック以降、インクルーシブ・グロースという言葉がずっと繰り返し出てきて、会議をやるたびにそのポジションがせり上がっていったのが非常に印象的だったと言っていました。

インクルーシブ・グロースというのは包括的な成長ということですね。言い直すと、誰かを取りこぼして成長していくことは限界があると。置いてけぼりのままだと。結局みんなうまく成長できないので、みんなを包括しながら、余り取りこぼさずに、みんなを持ち上げていけるというのが大事なのだと。リーマンショックのようなことの反省を受けて、2009 年、2010 年、2011 年、2012 年、そのあたりで国際会議 G8 とか G20 へ行くとずっとその話が出てきていて、OECD の方がプレゼンするというとその話、ワールドバンクの方がプレゼンするというとその話というふうに、毎年毎年、その位

置づけが上がっていったというのがとても印象的だったと言っていました。

まさにそのとき世界ではMDGs（ミレニアム開発目標）の後釜をどうするかの議論をしていたわけです。あれは2015年にまとめましたか。当然2015年になってぱっとまとまるわけではないので、3年、4年前から、ではMDGsの後どういう世界目標を立てるかということを議論していました。そのときがまさにそういう時期なので、SDGsをどういう枠組みで立てるかという話のときに、インクルーシブ・グロースということがずっと言われていて、そして、それが2015年にSDGsに結実した。だからSDGsのメインスローガンは、誰一人取り残さない世界をつくろうということなわけです。これが伏線の1本目です。

2本目。もう一つ、国内的には、でもやはりリーマンショック以上に重大だったのではないかなと私が思っているのは東日本大震災。言うまでもないですけども。そして、あれ以降打ち続く水害が、災害がありました。茨城県も常総の水害がまだ記憶に新しいところですが、そういう中で、例えばですが、あの東日本大震災以降、地方に移住する若者がそれに比べて3倍に増えています。まだまだメインストリームにはなっておりません。まだまだメインストリームにはなっていないから、若者たちはまだ大勢としては東京をめざすのですが、だけど、もう東京の暮らしはということで地方に帰る。Uターン、Iターン、Jターン、いろいろなモデルがありますが、そうした人たちも増えているわけです。

こうしたことが今どういう状況をもたらしているかというと、例えば、島根県では、あそこは19市町村ありますが、19市町村のうち9市町村で、要するに半数の市町村で、今、0歳－4歳人口が増え始めています。これは波及していき鳥取も増え始めています。あとは鹿児島島の離島とか、そうしたところも増えていっています。

これは島根県の中山間地域研究センターにいた藤山浩さんという方が非常に印象的なことを言っていました、今増えているのは地方の地方です。島根県も松江は増えていません。鳥取も鳥取市は増えていません。島根県でも増えているのは益田のもっと中山間のほうの地区だとか、島根でいえば央南とか、代表格は島根県の海士町という東京から3時間半、フェリーで行かないとたどり着けない離島ですが、そうしたところに人が増えていっている。こうしたことが過疎地の最先端地域で起こっています。これは一体何なのか、何を意味するのかということが伏線の2つ目です。

もう一言言うと、2014年に出て世の中を席卷した、多分茨城県でも話題になったと思いますが、増田レポートです。消滅可能性自治体というやつです。1,700の自治体のうち896が消滅してしまうよという、あのレポートはかなりの部分、現状では裏切られています。覚えていらっしゃるでしょうか。あのときは、田舎の田舎は切り捨てるしかないのだ。無理だと。もう持たないと。なので、中核市レベル、県庁所在地レベル、ハブ

レベル、県庁所在地とか、北海道でいえば、県庁所在地でなくても、旭川とか函館とか、そういう 30 万人ぐらいのところが頑張って持つしかも世の中はもたないのだという構成で考えられていました。

ですが、今は北海道の函館、旭川は極めて元気がありません。松江もかなり減っています。県庁所在地はかなり厳しい状況で、むしろ若者、子育て世帯が増えていっているのは田舎の田舎です。何でこういうことが起こっているのかということです。これが伏線の 2 つ目。

3 つ目は、【資料】 1 ページ目、建物の写真が出てきます。上に建物が写っていて、下におじさんが写っている。この上にある建物は今年の 4 月に沖縄で開校した総合エンターテインメントスクールです。専門学校です。名前をラブ＆ピース専門学校とといいます。普通、ラブ＆ピース、愛と平和ということは一般的に言われますが、ラブではありません。ラブです。点々がありません。ラブ＆ピース。英語でラブといたら、笑うですね。笑いと平和です。吉本興業さんがこの専門学校をつくりました。吉本さんは東京とか大阪に吉本クリエイティブスクールというお笑い芸人養成学校は持っていますが、ここはそうではなくて総合エンターテインメントスクールですので、アニメーターも養成するし、映画プロデューサーも養成するし、漫画家も養成するしというような学校で、吉本さんがとても力を入れて、お金もかけてつくった日本初の拠点なのです。そこの 1 階を子ども食堂にしています。【資料】 1 ページ目上段右側の写真がその子ども食堂です。

この 1 階を子ども食堂にしようと言ったのがこの下に写っている大崎社長です。大崎社長が、子ども食堂の上にたまたま専門学校があるぐらいの勢いでつくろうじゃないかと言って、そうしました。

大崎さんはでは何で子ども食堂をつくろうと思ったのという話です。こう言っていました。彼は自分はいいい父親ではなかったと。働きづめでほとんど家に帰らない。子どもが 3 人いたそうなのですけどね。家に帰らない、いい父親ではなかったんだが、あるとき母ちゃんと飯を食っていたら、母ちゃんが「うちの子たちはぐれない」と言ったそうです。大崎さんが「何で」って聞いたら、「うちの子たちには三度三度飯を食わせているからだ」と。「三度三度飯を食わせていたら子どもはぐれんのだ」と母ちゃんが言った。そんなもんかと思って聞いていたんだけど、そのお母ちゃんが 5 年前に亡くなりまして、余りこういうことを言うと公私混同みたいになるから言いたくないのだけれどと言っていました。夫婦ともに沖縄にとっても思い入れの強いご夫婦ですから、せつかくそこに専門学校をつくるのであれば、沖縄の子たちと専門学校生が交わるような子ども食堂をつくろうではないかということでご提案されたのです。

大崎さんに、ではそこで専門学校生と沖縄の子どもたちがどういうふうに関わってほしいと聞いたら、大崎さんはこう言っていました。専門学校生に何か子どもたちに教え

てやってほしいとか、伝えてやってほしいとか、そういうことは思わない。一緒に飯を食いながら雑談する中で、この子たちが普段何を感じて生きているのか、何がおもしろいと思っているのか、何がつまらないのか、地域とか家族とかそういうものをどう思っているのか、そういうことを何となく一緒に飯を食って話す中で、時間を過ごす中で感じ取ってくれば良いと言ったのです。とてもすばらしいセンスだと思いました。こういうセンスのある方が沖縄で子ども食堂を始められました。

【資料】2 ページ目の上、もう 1 枚写真を載せておきました。真ん中で腕を組んでいるのが私でございます。左側に写っている人、誰だかわかりますか。ちょっと横を向いているのでわかりにくいのですが、サッカーが好きな方、こちらも鹿島アントラーズがありますから、サッカーが好きな方はわかるのではないかと思います、前の日本代表の監督だった岡田武史さんです。彼は今、愛媛県の今治市というところでサッカーチームのオーナーをやっております。もう監督ではないのですね。オーナーになっています。2018 年の 2 月の会社の方針発表会で今治の地に子ども食堂をつくるのだと宣言しました。

では岡田さんが何で子ども食堂を作るんだということです。去年でしたか、こう言っていました。サッカーのクラブチームというのは、一番上にトップリーグがあって、次に若者たちのユースがあって、一番下には小学生の小さな子たちのクラブを持っているものなのですが、そこで遠征に行きますというその日になって、コーチが一人欠席ですと言ってきた。何でなんだという話になります。当日ドタキャンです。何で当日になってキャンセルなんだと。一人親家庭の子だったらしいのですが、お金が工面できないと。子どもに申しわけないから行けるよと言っていたし、クラブにも申し込んでいた。だけど当日になってもどうしても工面できないので、当日になってごめんなさいしてきたということです。

普通だったら、ここでドタキャンされてけしからんなで終わるはずなのです。ドタキャンなんて冗談じゃないよ、まいっちゃうなといって終わるはずなのですが、岡田さんが偉かったのはそこで終わらなかったのです。彼の会社の企業理念は「ものの豊かさよりも心の豊かさを大切にする社会をつくる」というものです。今治の彼の事務所に行くと、それが書家によって書かれたやつが額縁に入って飾ってあります。ものの豊かさよりも心の豊かさを大事にするという我々が、遠征費が出せなくて遠征に行けない子をつくっていいのかという話になりまして、その日は、どこの誰だかわからない足長おじさんがお金出してくれたということにして、その子を遠征に連れて行きました。

ただ、そこでも終わらなかったのです。そういう子はほかにもいるよねということになりました。彼のところは今、一人親家庭の子はクラブ費用が無料です。クラブ費用を無料にただけでは遠征費用は出ません。飛行機に乗ったり新幹線に乗ったりしますか

ら。なので、その子たちのためには 300 万円の基金を会社の中につくり、必要なときにはその子たちには給付をするということにしたのですが、そこでも止まらなかったのです。

ということはというのでいろいろ調べていくと、今治市の中には、クラブ費用を払うとか払えないとかそういうレベルではない。もっと日々大変な人が、子どもがいるのだということも知っていきます。では、今治市の皆さんに応援されて我々は持っているのだから、今治市の皆さんに恩返しをするために今治市で子ども食堂つくろうということ宣言されたということです。

先日、私が打ち合わせしていたのは、あるコンビニ業界の大手さんですが、そこが今、子ども食堂をやろうとされています。12月にはある県で何カ所か開設すると思うので、いずれ発表があると思いますが、そういう動きがあります。

伏線の3つ目といって、今、この話をしています。何を言っているかという、吉本興業にしろ、岡田さんにしろ、コンビニ大手にしろ、福祉の人ではありませんねということ。お笑いであり、スポーツ界の人であり、小売業界の方です。つまり、福祉の世界ではない人たちが関わり始めていますねということです。これは何でなのでしょうねということです。これが伏線の3つ目です。考えたい3つ目です。

そして4つ目。4つ目はきょうの副題です。「私たちにできること」としました。「私たちにできること」というタイトルですから、自分ができることを考えていただきたいということです。どこかの誰かが何かやれという話ではありませんということなので、自分は何ができるのかなと考えてほしい。誰かにを何やらせられるのかなというふうには考えないでいただきたい。そのようなつもりでこの副題を立てています。なので、あくまで自分の問題だと、自分で考えることなのだというふうに聞いていただければうれしいということです。

この4つの伏線、SDGs、東日本大震災と人口構成、あるいは人口移動の今起こっている現象、そして、福祉業界ではない人たちがこうした問題に関わり始めているのはなぜなのか、そして、自分で何ができるのか、その4つの伏線を意識しながらこの子どもの貧困という問題をそれぐらいの枠組みで考えていきたいということでございます。

前置きが長くなりました。ということで、話の本題に入っていきたいと思いますが、まず皆さんに聞いてみたいことがあります。子どもの貧困、政府の発表によると13.9%、7人に1人です。7人に1人ということは全国で280万人います。1クラス35人学級の学校であれば、1クラス当たり5人が貧困です。

その実感はありますか。聞いてみたいと思います。7人に1人の子どもが貧困と聞いてどう感じますか。そんなもんだろうなと思っていますという人はチョキを上げてください。そんなにいるかなと感じている人はグーです。もっと多いと感じている人はパー

を上げてください。何で3つに分けるかはよろしいでしょうかね。一つ一つ聞くと半分以上の人はどこにも上げてくれません。きょうのこの感じだと7割ぐらいどこにも上げてくれないだろうという確信がありますので、同時に一斉に上げていただくということです。なので、上げやすいし、上げないほうが目立つので上げていただきたいなということです。

これは皆さんの感じ方を聞いていますので、どこに上げたらいいいのかなとか考えないでください。どこに上げるのがいいのかなとか考えないで、感じたままを教えていただかないと聞く意味がないので、そんなにいるかなと思っていたら遠慮なくグーを、もっといるんじゃないかと感じていたら遠慮なくパーを上げてください。別に正解はありません。皆さんの感じているところが正解ですから。私、これを全国で200カ所ぐらい聞いていますので、大体どんな感じになるかがわかります。

ということで、まずは皆さんでちょっと会場の雰囲気シェアしたいと思うのですが、よろしいでしょうか。決まりましたか。こうやって話しているうちにチョキって何だったっけなとなっていますか。ではもう一回言いましょう。チョキは7人に1人と聞いて、そんなもんだらうとを感じるです。グーはそんなにいるかなです。パーはもっといるはずだです。感じ方を教えてください。

よろしいですね。では一斉に行きますよ。せいのどん。そのままキープしてください。すばらしいですね。ありがとうございます。チョキの人ちょっと振ってもらえますか。俺だよというふうに。パーの方はちょっと振ってみてください。ありがとうございます。大体ですが、チョキが2割はいないな。でも1割よりはいたかもしれない。1.5ぐらいです。15%ぐらい。パーはそれより心持ち少ないので10%ぐらいとしておきます。ということなので、25%引くとグーが75%ぐらいだということです。ありがとうございました。

そんなにいるかなと感じているという人が75%、4人に3人ということです。おめでとうございます。皆さん大体全国平均でございます。全国どこで聞いてもこんなものです。6割から8割です。私、お隣の福島県で去年聞いたとき、青少年育成県民大会、1,000人以上集まっていますが、あそこではグーが9割以上でした。会場グーで埋め尽くされました。なので、7割5分というのは全然多くないのです。普通です。つまり、これは実感がないということです。

まずここから話はスタートしましょうということです。実感がないのは、全国どこで聞いてもそうです。私、今、200回と言いました。数えていませんが、大体それぐらい聞いています。グーが5割を切ったことは今までに2回しかありません。1回は名古屋市で聞いたときに5割を切りました。驚きました。おっ、グーがこんなに少ないと思って驚いたのですが、そのとき会場にいたのは誰だったかというと、里親さんたちです。

里親大会で話したときです。それが1回で、あとの1回は実は高知県で、先週の日曜日だったのですが、あれはどうだかなという感じです。私がこのアンケートをとる前に話し過ぎたのです。なので、みんなグーを上げてはいけないような雰囲気が漂ってしまって、まさに感じたままを教えてくれなかったという感じです。どこに上げたらいいいのかな、探られたという感じなので、あれは私の中ではカウントされていません。

そういう意味で言うと、グーが5割を切ることはまずないです。それは当然のこととして、どれだけ通学途中の子どもたちをじっと眺めていても、つぎはぎだらけの服着ている子とか今ほとんどいませんね。学生服の下袖口が真っ黒、家の前を通るとうわっと思うような本当に大変そうな家、もちろん今でもゼロではありませんよ。ゼロではありませんが、では7人に1人分あるかといったら、それはどう数え上げてもないでしょうね。

ということで言うと、目につく方は皆さんのご地元にもおられると思います。話は聞いたことがあると思います。自分の子どもとか親戚の子どもとかが通っている学校で、こんな大変なご家庭があるんだよとか、あるいは新聞とかニュースで見えることはあると思います。なので、ゼロとは思っていないでしょう。だけど、ゼロとは思っていないでしょうが、7人に1人とも思っていないでしょうねということです。

そういう意味で、この話にはまず実感がありません。ここからスタートしたいと思います。ここからスタートせずに、大変ですよねというところからスタートすると、皆さんの実感が置き去りになります。実感が置き去りになると物事うまく進まないものです。どこかでひっくり返ってくるのです。そんなふうには感じられないとか、反発する人とか、違和感を言い出す人が必ず出てきます。今でもそうだと思いますけれども。なので、まずは見えなくて当たり前、実感がなくて当たり前、そこから始めたいと思います。

では、実感はないけれども7人に1人になる。7人に1人になるのは、ある計算方式によるとそうなるのだ。計算方式というのは、中央値の半分以下という計算方式だ。それは忘れて結構ですけども、そういう計算方式にのっとって出すと7人に1人になってしまうのだ。ではその7人に1人になってしまう。それは誰なのだということです。それが結構大事だと思いますので、その話をしたいと思います。

赤信号と黄信号で考えましょう。【資料】4ページの下のスライドを見ていただきたい。貧困というのは、お金がなくて、つながりがなくて、結果として自信がないことを言うのですが、当然ながら段階があります。元気に働いていた段階から、ご病気をされて、失業をされて、お金がだんだんなくなっていった、そしてだんだん生活困窮と言われる領域に入っていく。そういう中で人によってはアパート失ったり借金をつくってしまったりしてだんだん泥沼にはまっていく。段階がありますよね。木の股から産まれた人はいませんから、必ずみんないいときもあったわけですね。いいときもあったわけだけ

れど、今厳しいときに至っているということは、何かのルートをたどってそれになっているわけです。いきなり産まれてこのかた、真っ赤かの赤信号という人はほとんどいません。

そういう意味で言うと、人には段階というものがある。なので、黄信号の段階というのも当然あるわけです。では黄信号の段階というのはどういう状態なのだという事です。

これは高齢者で話したほうがわかりやすいので高齢者でお話しします。高齢者の方が生活が比較的厳しくて黄信号がとる。これは何をきっかけにと言われているかご存じですか。葬式です。葬式をきっかけに黄信号がとります。ご自分のではありません。他人というかお世話になった方です。人間はある年齢になるとお世話になった方が立て続けに亡くなるということが起こります。80代ぐらいになると、地域でとてもお世話になった方が亡くなったその数日後に田舎の親戚が亡くなるみたいな、そういうことって起こったりするのです。そうすると、当然ですが、お世話になったのだから行かなければいけませんよね。行きたいですね。行って最後のご挨拶をしたい。だけれども、手ぶらで行くわけにはいきませんよね。あっちに香典を包んでいってこっちに香典を包んでいく。田舎の親戚ということになると、人によっては飛行機に乗ったり新幹線乗ったりしなければいけませんね。結構飛んでいくなということがわかりますよね。結構飛んでいくなということがわかったときにリアルに考えてしまうわけです。では、ここでここを出してしまつて次の年金まで持つかというね。きょうが11月13日、ちょうどあと1カ月です。折り返し点です。12月15日がまだ遠いです。そうすると、今ここで使ってしまうと、と思うわけです。今年の夏は猛暑でした。台風もいっぱい来ました。瓦の1枚、2枚飛んでしまったかもしれない。思わぬ出費があったかもしれません。そういう中で、今ここで使えないというふうになる方というのは残念ながら現実にいるわけです。そうすると、申しわけないのだけれどもということでどちらかをスルーすることが起こります。ご本人の気持ちはいかばかりかという感じです。まず悔しい。だけれど悔しいだけではないです。情けないでしょうね。申しわけないでしょうね。そういう非常にへこむ体験です。悔しい、情けない、申しわけない、かつ考えてしまう。自分が行かないから考えてしまう。何か言われているのではないかと考えてしまう。何であいつ来てないんだとか、どうも最近大変らしいぞと言われているのではないかとか考えてしまいます。考えるなと言っても考えてしまいます。

そういうときにやはり人はへこむのです。今まで地域でご自分から率先してご挨拶をされていたような方が挨拶をしてこなくなるとか、田舎にちょいちょい電話をかけてきたような人がかけてこなくなるとかということになります。そうやって周囲とおつき合いのないひとり暮らし高齢者というのが生まれてくるのです。これが黄信号です。

だけど、このときに周囲の人は気づくかということ、気づかないでしょうね。たかだか葬式に行かないだけですから、気づきませんよね。ご自分で言いふらすかということ、そんなこと言いふささないでしょう。周りは気づかないでしょうね。だけど、そういう状態がしばらく続くと、その状態で認知症とかが始まってしまったりするわけですが、周りとおつき合いしてないですから誰にも相談できません。うまく介護サービスに引っかからなかったりするのです。そうしているうちにごみの出し方がわからなくなってしまって、家の中にゴミがたまっていきます。外から見えるようになったり臭いが立ったりして周囲が気づく。ここが赤信号です。赤信号というのは目立ちます。赤信号がともったら地域の人にはあつという間に全員知っています。なので、必ず役所に連絡が行きます。役所の人は何とかしろというので訪問します。コンコンコンと、何々さんと、はい、はいとドアを開けてくれるか。開けてくれません。「すみません、おたくの荷物がちょっと臭いが立つというのでご近所から苦情が来ていまして」、「ああそうなんですか、すみません、今すぐ片づけます」と言うか。言わないです。「お一人で片づけるの大変でしょう、我々が手伝いますよ」と。「いやいやありがたい。ぜひお願いします」と言うか。言わないです。ドアを開けてもらうところからコミュニケーションをとるところ、片付けの合意に至るまで、人によっては何年もかかります。現実にかかっていますから。その間に専門家の方たちが何十回と訪問しなければいけません。赤信号がともってから対応するというのはものすごく手間と暇と時間とお金がかかります。本当に大変です。これを行っている方たちにはご苦労さまですとしか言いようがありません。これが黄信号から赤信号へという場合の高齢者パターンです。

では子どもについてはというと、黄信号は何でともるか。お葬式に当てはまるのが修学旅行です。修学旅行へ行けないというあれです。修学旅行へ行けないという話をする、子どもの貧困の話をする、と怒る方がいます。特にこれはご高齢の方に多い。きょうの皆さんはいろいろ団体関係の方ですから余りそういう方はおられないと思いますが、地域の本当に一般市民の方などを対象にした話だと本当に怒り出す人がいます。

こう言われるのです。修学旅行に行けなくて大変だ。うん、で、修学旅行に行けなかったら何か、退学しなければいけないのか。いや、退学しなくて大丈夫です。修学旅行へ行けなかったら何か、進学できないのかと。いや、進学できます。修学旅行へ行けなかったら何だ、死んじゃうのか。いや、死にません。死にもしないし、退学もしなくていいし、進学もできる。じゃあ何が問題なんだと。自分は中学出てから半世紀以上、一度も修学旅行なんぞ行ったことがない。だけど、働きずくめに働いて、子どもを育て、孫を育て、納税し、やってきたぞと。やっていけるぞと。自分は特別な人間ではないぞ。行けないぐらいで何だ。俺、行ってないしって。そうやって怒られる方がいます。全部そのとおりなのです。修学旅行に行かなくても退学しなくて結構です。進学もできます。

死にもしません。大したことではない。たかだか修学旅行に行けないだけです。でも、それが何の問題なのかというと、さっきの葬式みたいなものなのですよということですね。

今時の修学旅行は、2泊3日、3泊4日にその場と一緒にいけないというだけではありません。行く前には、自由時間に、どこに訪問するか、班で相談して決めなさいみたいな事前学習期間というのがあります。その話の輪には余り入れません。帰ってきておしまいではないです。帰ってきたら帰ってきたで今度は思い出話で盛り上がるというステージがあります。あ那时候、京都の清水寺に行ったら、変な外国人に声をかけられて、あんときのあんたのあわてっぷりといったらマジうけたわとか言われて、なんだなんだといった盛り上がるというステージがあります。そういうステージにも入れないです。中高生ぐらいになるとかわいげがありませんから、私は修学旅行へ行けなくて悲しいなどと言わないわけです。そんなところへ行ったら何がおもしろいかわからないとか言ってしまうわけです。そうしたら、何だあいつはということになります。何だあいつはということになって、クラスでぼっちが生まれるわけです。

でもこの段階では学校は余り気づいてないかもしれません。だって、誰かに殴られたわけではないですからね。誰かに靴を隠されたわけでもありません。学校の先生も気づいてもこう思っているかもしれない。あの子があんな憎まれ口たたいたからああやって仲間はずれになっちゃうんだよと。何でああいうこと言うかなという感じです。その子の問題にしているかもしれません。

でも、そうやってぼっちというのは生まれていきます。そういう子というのは何かの拍子にいじめのターゲットになるので、いじめのターゲットになったりして、何かの拍子に事件になったりするわけです。それが赤信号です。そうするとみんなが一斉に騒ぎ出します。学校は何を見ていたんだ、教育委員会は何をしていたんだ、親はどうしていたんだとみんなが一斉に騒ぎ出すのです。ただ、その前は黄信号の段階がありましたよね。でもそこは余り気づかなかったですよ。スルーしてしまいましたよねという話です。

こういうふうにして黄信号と赤信号が関係していくのです。何で7人に1人になってしまうかというと、この黄信号まで含めているからです。大人も子どももです。なので、この黄信号の人たちはたかだか葬式に行っていないだけです。たかだか修学旅行に行っていないだけなので、当たり前ですが見てもわかりません。学校へ行っています。制服を着ています。高校生だったらスマホぐらい持っているかもしれません。そういう意味で、見ても全然わかりません。見ても全然わからないのですが、そこまで含めて数えるので280万人とかになってしまうわけです。

さて、お次の問題は、何でここまで含めるようなそんな甘いゆるゆるの基準にしてい

るのだということです。じゃあ死なないじゃないか、死なないなら貧困じゃないじゃないかということです。何でそんな緩い基準にしているのだということです。これは誰が基準をつくっているのかということに関係しています。この基準をつくっているのは日本政府ではございません。各国がばらばらの基準でやっていたら国際比較ができませんからね。つまり国際機関がこの基準を統一しております。

ではその国際機関はどこなのでしょう。貧困問題といえば国連の人権理事会かなという感じでしょうか。違います。この基準をつくっているのはOECDでございます。OECDのミッションは何でしょうか。きょうお集まりの皆さんはお詳しいと思いますが、OECDのミッションは各国の経済成長の促進です。各国の経済成長の促進を第一ミッションとする国際機関が何で貧困を調べているのですかね。経済の活性化と関係ないじゃないかというふうに思っていないからです。思っていないから、各国からデータを集めて、手間と暇と時間と金をかけて分析して、わざわざ各国に、あんたのところ高過ぎませんかと勧告を出したりしているのです。何で思っていないのですかね。それがさっきの話です。インクルーシブ・グロースの話です。

先進国の貧困は相対的貧困といいます。相対的貧困、つまり相対的な問題です。相対的な問題ということは、私たちにはよりなじみのある言葉があります。格差です。格差の問題でもあるということです。

では格差についてはというと、世界的に合意されていることが2つあります。一つは、ある程度の格差は経済成長の促進に必要だということです。イノベーションを起こすために必要だ。どれだけ一生懸命働いても、隣のぼんくらと変わらない収入だったら頑張って働きはしない。どれだけ頑張ってもいい商品をつくっても、隣の会社と同じ収入しか得られないのだったら商品開発の意欲がわかない。なので、ある程度頑張ったら報われるという格差は新商品の開発や経済の発展に必要である。これが世界的にほぼ合意されていることの一つ。

もう一つ、ほぼ合意されていることがあります。それは何かというと、ただ行き過ぎた格差はメリットよりもデメリットのほうが大きくなるよねということです。行き過ぎた格差が大きくなると社会が身分制のようになっていきます。どんどん固定化していき、連鎖していけば、そうなる諦めが社会に広がります。諦めが広がっていくと、治安の不安に結びついたり、まさにテロみたいなことが起こったりしていきます。そのようなことが起こっていくと社会は不安定になっていきますから、もちろん各国の投資も呼び込めてきません。そういう意味で言うと、行き過ぎた格差はむしろその国の発展の足を引っ張る。メリットよりもデメリットのほうが大きい。これもほぼ世界的に合意されています。

世界的に合意されてないのは何なのか。この境目はどこなのだという事です。適度

な格差と行き過ぎた格差の境目はどこなのだ。人によっても全然意見が違いますよね。どこなのだ。OECDが見ている境目が相対的貧困ラインだということです。ここを下回る人たちがどんどん増えていくような国は行き過ぎているのではないですかということです。なので、行き過ぎないように、ある程度の幅に収めたほうがいいのではないですかと勧告を出しているということです。

それは経済成長の問題なのです。インクルーシブ・グロースの問題なのです。どんどん人を切り捨て、取りこぼしていくような発展に持続可能性がないから、なので持続可能な開発をしましょうということです。この問題は人権の問題でもあり経済の問題でもあるということです。なので、基準は、死ななければいいという基準では立てませんということです。息も絶え絶えでもいいからとにかく二十歳を超えてくれればいいのだというように子どもの貧困は立てません。とにかく死ななければいいのだったらもっと厳しい基準でいいのですけれども、そうではないのです。この人たちは、成人して、社会の中で役割を果たし、できれば働き、できれば納税してくれないと、誰が困るかって、私たちが困るのです。真っ先に困るのは私たちです。私たちの年金は彼らが払ってくれますから。彼らが払ってくれなければ私たちの年金は出てきませんから。なので、どちらが先に詰まるかという、確実に私たちが先に詰まるのです。なので、私たちのために、死なないだけでなく、世の中の担い手になってもらいたいわけです。だから、息も絶え絶えでもいい、虫の息でもいいからとにかく死なないで二十歳になってくれればいいというふうに基準は立てませんということです。人権の問題として、人は死なないために生まれて来たのではないけれどねという当然の大前提はあるわけですが、それだけではないということです。

ですから、黄色まで含みます。黄色まで含むこの人たちは、何度も言いますが、たかだか葬式に行けていないだけ、たかだか修学旅行に行けていないだけです。だけど、たかだかと言わず、されど葬式、されど修学旅行と考えようよということです。なぜならば、あんたたちの地域、社会は発展し続けたいのでしょう。持続可能性を保ちたいのでしょう。だとしたら、そのように考えようよと呼びかけられているということです。

なので、最初の話に戻りますが、実感はありません。実感がなくて当然です。ですが、実感が無いのには理由があるのだということです。黄信号まで含めているのには理由があるのだということです。その理由をわかっただけだと、実感が無いことと7人に1人の間を埋めることができます。ぜひ埋めていただければと思います。なので、見えないから、うちの地域にはそんなやつはいないのだという話ではなのですよということです。

これが先ほどの伏線の1本目に関わっております。SDGsです。それがまた同時に3つ目に関わっています。なぜ福祉を超えるのかです。

黄信号の人たちというのは、想像してみてください。たかだか修学旅行に行けないだけですから学校へ行っています。スマホぐらい持っています。制服を着ています。どれだけ栄養のあるもの食っているかはともかく飯を食っていますよ。

この人たちになじまないのは、支える側として考えたときに、この人たちにうまく届かない支え方は個別の相談窓口づくりです。この人たちはどれだけ相談窓口をつくっても行きません。自分のことではないと思っていますから。そういう窓口はもっと大変な人のためのものだろうと思っていますから。多くの人がそう思っているように。なので、そういう場所は自分が行く場所ではないと思っています。自分はまだまだ頑張れるし、やれるし、そんなところに行くものではないと思っています。人によっては、行ったら負けだぐらいに思っているでしょう。あんなところに行ったら負けだと思っているでしょう。

なので、赤信号の子にもそういう子が結構いるのですが、黄信号の子は特に黄信号である自覚がありません。だから窓口をつくってもだめです。来ません。ではこの子たちには何ができるかという、どこに行けるのかを考える。この人たちはどこにだったら行けるだろう。この人たちは、そこに行っても、あんな、大変な人なんだね認定されない場所だったら行けます。そこに行ったら、あんな、大変な人なんだねということになる場所には行けません。あんな、大変なんだね認定されない場所です。青信号だって言って行ける場所でないに行けません。青信号だって言って行ける場所というのはつまりどういう場所かという、誰が行ってもいい場所です。だから誰が行ってもいい場所でない黄信号対応はできません。誰が行ってもいい場所をつくろうということです。それが居場所というものです。

そして、この2つは明確に役割を分けましょうといっています。黄信号対応と赤信号対応ですね。【資料】4ページの下のスライドを改めて見てみてください。赤信号対応はさっき言ったような案件です。どうしたって赤信号がともってから慌てて対応する事後的な対応になります。個別に対応しなければいけません。訪問が欠かせません。訪問が必須です。訪問なしに何とかやろうなんて無理です。専門家が介入していく必要があります。

地域一住民のおばちゃんをつかまえて、あのごみ屋敷へ行って、あんな、何とかしてきてと言って、冗談じゃないわよと言われておしまいです。無理です。深刻な虐待家庭に入っていく、あんな、親子関係調整してきてって無理です。できません。しかも個人情報厳密に管理していく必要があります。あっちこっちで言いふらされてはたまりません。なので、きちんと守秘義務がかかった人が対応する必要があります。手間と暇と時間とお金はやたらめったらかかります。なので、どうしてもこの領域は行政向きです。

もちろん民間でできないことではありません。私はどちらかというところをやってきました。赤も赤、真っ赤っかです。野戦病院と言われました。そういう世界でやってきましたので、純粹民間でもできないわけではありませんが、しかし、私もみんなでやろうよという気にはなりません。結構な覚悟と経験とノウハウが必要です。行政以上に知識も必要です。そういう意味では誰でもできるとは私はとても言いません。民間向きか行政向きかといったら、行政向きです。

しかし、黄信号対応は民間向きです。予防的 です。面的な対応です。誰でも行っている場所ですから、年収 1,000 万円の子だって来るかもしれません。年収 1,000 万円の大人だって来るかもしれません。いいんですそれでというふうに構えるということです。

なので、公金を入れる理屈はなかなか立ちません。何で俺の税金で年収 1,000 万円の子が飯を食っているんだという話になりますからね。年収 1,000 万円の子は来ていませんと言い切れないというのが誰でも来ていい場所ですから、一人もいないかもしれませんけれども、いるかもしれないです。いないと言い切れないのが誰でも行っている場所ですから。となると、公金を入れる理屈がなかなか立ちません。そういう意味で、地域予防的で面的な対応というのは住民対応であって、そしてインクルーシブ、誰でも行ってよい、やりくりで対応する、こういうところは民間向きです。

ここを一回分けていただきたいと私はお願いしています。同じ貧困という言葉で両者をくくって考えていたとしたら、黄信号と赤信号に分けてください。それで自分たちがやるのはどちらだろうと考えてもらいたい。どっちに軸足を置くのかと考えてもらいたい。それが 4 点目です。自分に何ができるのかというときに、ふーん、へーで終わらずに、では自分はどうするんだということです。

幾らでもやりようはあります。赤信号を行政の委託を受けてやる。そういう人たちもいっぱいいます。黄信号を自治会の人たち、PTAの人たちと一緒に地域づくりとしてやる。地域活性化としてやる。そういうこともできます。それによってターゲットが変わってきますし、やり方も変わってきます。それぞれのターゲットにふさわしいやり方、方法をとらないと、それを望む人は来ません。

よくここら辺が曖昧にふわーっとなっていると、こんなことを言ったりします。誰でもいい居場所をつくってやっているんだけど、本当に大変な子に来てほしいとか言うのです。いいんですよ。いいんですけれども、本当に大変な子が来たら本当に大変ですよ。来ているほかの子を殴ってしまうかもしれませんよ。その子が帰ったら何か物がなくなっているかもしれませんよ。それでもやるということをきちんと全員で合意をとってやっているなら何の問題もないのです。

少年院の退所者の受け皿になるような支援の場所はないかといろいろな人と話し合いながら今探しています。そういう場所があってほしい。なので、そういう場所はある

ことは大歓迎だけれども、それはきちんと関係者の間で合意がとれてないと、ふわーっ
としていると怒り出す人が出るのです、そういうことが1件起こっただけで。うちの子
は危なくて行かせられないと言いつつ親が出てくるとか、ボランティアの人が、あの子
がいるとうまくいかなくなるんだと怒り出すボランティアが出てくるとか、そういうこ
とでは困るのです。やるなら覚悟を決めてやっていただきたい。

必ずしもそうでなくても構わない。なので、黄信号対応だっていいわけです。どっち
が尊くてどっちが尊くないとか、どっちが大事でどっちが大事ではないとか私は思いま
せん。どっちも大事です。どっちも必要です。両者は相互補完的な関係にあります。

【資料】5ページの上のスライドに書いておきました。黄信号と赤信号というのはつ
ながっていますから黄信号対応が充実していけば人がこぼれにくい地域がつくれます。
人がこぼれにくい地域ができれば、どういうことかという、10人に3人とか4人
が黄信号から赤信号にだだだ転化していくような地域だと、あっちこっちでばんばん
赤信号がともるので、専門対応が追いつかないのです。もう役所にも専門家はそんなに
いませんよね。みんな非正規です。なので、何でもかんでも赤信号がばんばんともるよ
うな地域で対応を全部お願いできないのです。ということは、10人に3人、4人があ
っちこっちで赤信号がともるような状態を防がないといけません。黄信号のこぼれにく
い地域づくりで黄信号対応がある程度しっかりできると、それが10人に2人、3人に
なったり、1人、2人になったりします。そうすると、少なくとも、かつ非正規ばかりだ
けど、その専門家の人たちも、その人たちに個別に手厚いケアができるので、結果的に、
漏れて、本当に重大な、命に関わるような事件まで行く人が減ります。そういう意味で
黄信号と赤信号対応は別々ですが、役割的には相互補完的です。なので、黄信号対応が
しっかりしていると赤信号対応も楽になります。そういう意味でつながっています。こ
こが官民連携の領域です。民間が主にやる領域と官が主にやる領域、そこを一度分けま
しょうと。もちろん現実グラデーションですから、この間にいろいろな形態があって
いいのですが、子どもだって大人だっていろいろな人がいますからね。黄信号と赤信号
の間の人とか。

ついでに言うと、これは状態ですから、去年は赤信号だったんだけど、今年は持
ち直して黄信号になったとか、今ちょうど青と黄色の間にいますとか、現実人間はグ
ラデーションですからいろいろなものがありますが、頭の中一回分けましょうと。

この話が3つ目に関わってきますと言ったのは、この黄信号対応にぴったりなのです。
何がというと、子どもの居場所づくりとか子ども食堂がです。吉本の大崎さんや岡田さ
んやコンビニの人たちとずっと繰り返し繰り返し話して行く中で、こういうことかとわ
かってきたことがあります。それは【資料】2ページの下と3ページの上です。結局、
皆さんはこういう理屈で関わっています。人と人が触れ合う優しくてあったかいにぎわ

いを地域につくりたい。まずこれです。そして、そのときにつながりやお金がなくてはじかれる子はいないほうがいい。そういう子を出してはいかんということです。これが大事です。前半が地域交流拠点づくりです。後半が子どもの貧困対策です。この2つがこの順番で立っているということが大事です。前に出てくるのは地域交流拠点づくりなのです。

2カ月前でしたか、茨城町に行きました。知り合いの学生が、もう卒業しましたが、茨城町で地域おこし協力隊をやっているのです。彼が今、商店街の中に入り込んで、そこに交流拠点づくりをやっています。そこの商店街は30店舗あるのですが、今8店舗しかやっていません。ほぼすべて開店休業状態です。だけど、そいつがお世話になっているというので私も挨拶回りを一緒にしまして、1軒、駄菓子屋さんがありまして、茨城町でもう1軒しかないのだそうですね、昔ながらの駄菓子屋は。そこに行ってきました。72歳とおっしゃっていたかな、おばあちゃんがやっています、いろいろ話しました。昔は、ここの前に、車通る通りなのですが、ガキどもがわーっと来て、チャリンコをばらばらにとめて、うちの中でわいわい騒いで、奥にゲーム機が置いてあるのですが、それやりたがってとか、もうとにかく大変だったよとか言いながら、顔はちょっとうれしそうみたいな、懐かしそうみたいな感じです。それで、今はねみたいな感じで、誰も来ませんよね。私がいる間も誰1人来ませんでした。そういう中で、当然継ぐ人もいない。あと何年かでここもおしまいだと言っているわけですが、このおばあちゃんに、あんた、子どもの貧困対策で何かできることありますかと言ったら、ああ、そんな難しいことは私にはわからないと言われておしまいですよね。それはそうだ。子どもの貧困対策と聞いて、専門的な感じがしますものね。どこかに大変な子がいるのでしょうか、引っかかってくるのは赤信号の子ですから、とても大変な虐待家庭に入っていけるか。いやいや、私は入れませんよ、そんな。ひきこもりの子をどうやって連れ出すか。いやいや、そんな私、わかりませんよとなりますよね。なので、私にできることはないと言う。貧困から入ると、多くの方は、この地域ではそういう人がいるのかといって引っかかってくるのはさっき話した赤信号の人。そして、その赤信号の人が引っかかってきたときに一市民の方が感じるのは無力感です。自分にできることはないというね。実際そうだ、赤信号の人に一市民は簡単に手は出せないから。

その理屈でいくと、このおばあちゃんは、私はとてもできない、役所にやってほしい、頑張ってもらいたいという話になる。でも、にぎわいをつくりましょうという話だったらこのおばあちゃんは乗ってくれるわけです。そこで頑張っている。そこでにぎわいをつくらうと思っている。今度、秋の集まりをやろうと思っている。いいわね、ぜひ、うちも協力するよ。何だったらうちの駄菓子もそこで売ってほしいなという感じですよ。そのときに、いろいろな人、いろいろな子が来られるようにしたらいいよね。そこをお金

とかつながらなくてこぼれる子がいてはいけないよね。それはそうだよねになります。その理屈なら全ての人が乗ってこられます。だから福祉を越えているのです。

そして、そういう理屈でつくられる場所だから黄信号の子が来られるのです。なので、地域で誰でもありの場所をつくと、それは実態として見たときに、気づくのは自治会の子ども会みたいになります。やっていることは自治会の子ども会です。岡田さんが言ったことが非常に印象的でした。帰りに、今日どうだったと聞いたのです。ちょっと言いにくそうにして、申しわけないけど、もうちょっとみんなが、すみませんと言って入ってきて、ありがとうございますと出ていく場所かと思っていたと彼は言ったのです。非常に典型的かつ象徴的な言い方だと思ひまして、とっても印象深く覚えています。何となく来ている人が肩身を狭そうにしている場所だと思っていたのです。相談に来る人ってそうですね。肩身を狭そうにしています。申しわけなさそうにしています。あの感じをイメージしてしまっているのです、福祉系を。だけど、行ってみると、子どもたちはそこら辺でばーっと走り回っているわけです。1軒家なのですが、所狭しと走り回っているわけです。異年齢集団だということところが重要なのですが、小さい子の面倒を3年、4年上のお兄ちゃん、お姉ちゃんが見てくれるものだから、母ちゃんたちが子どもから目を離せるわけです。普段、子どもに食わせるだけで目いっぱいなわけです。自分の食事時間なんて5分もとれないわけです。そういう中で自分の落ち着いた食事時間なんか1年中とれないその人が、子どもをほかの子たちがみてることで、ほかのお母ちゃんとかくっちゃべりながらゆっくり夕飯を食べるという、これはその人たちにとってはスペシャルな時間なのです。スペシャルな時間なのでずっとしゃべっているわけです。ずっとしゃべっているので、やっている人たちは、もう7時半になったのだから早く帰れと言っているわけです。そういう空間なわけです。そういう空間だというふうに行ったことがない人はイメージできないのです。子ども食堂ってもっと貧困系のものだろうと思っているから。もっと福祉系のものだろうと思っているから。もっと肩身狭そうに入ってくるところなのではないかなと漠然と思っているから。なので驚くのです。

なので、実際に行ってみていただくと、いろいろなタイプの子ども食堂があるから、全てがそうではないですが、多くはやっていることは自治会の子ども会です。恐らく、この夏、一番多くスイカ割りをやったのは子ども食堂ではないかと私は思っています。流しそうめんをやったのは子ども食堂ではないかと思っている。この12月に全国で一番多くクリスマス会をやるのは子ども食堂ではないかと思っています。

今、大体2,500から3,000カ所ぐらいになりました。2年間で2,000カ所増えているのです。2年間で2,000カ所、何でこんなことが起こるのか。普通こんなことは起こらないのです。厚生労働省は子ども食堂に関しては推進計画を立てていません。補助金を出している自治体も多くはありません。推進計画もないし補助金も出ないのに、お互い

見ず知らずの人たちが全国で同時多発的に 2,000 カ所やり始めたのです。たった 2 年間の間に。そんなことは普通は起こらないです。普通起こらないことが起こっているのは、この理屈にはまったからです。

なので、この理屈にはまった人の典型を言うと、こんな感じです。山口県の長門市でお寺の住職さんが子ども食堂をやっています。やってよかったことはと彼に聞いたら、こう言いました。地域の方に開いて毎週日曜日お勤めをしていた。毎週毎週信心深い方たちが来てくれていた。だけど、それは 70 代、80 代のおじいちゃん、おばあちゃんがぼつんぼつんと 3～4 人、その人たちの前で今週のお勤めを話させていただく。何年も前からそんなもんだったし、寂しいとも思っていなかったのだけれども、たまたま子ども食堂を始めました。そうしたら、子ども食堂のある週は、さっき話したような感じで、子どもからお年寄りまでごちゃっという。本堂所狭しと動き回っている中でお勤めをさせてもらう。これは住職冥利に尽きるのだと言っていました。そうだったよなという感じですね。大勢の人に聞いてもらえる、お寺ってそういう場所だったよなという感じです。なので、やめられないと言っていました。

愛知県に蒲郡というところがあります。そこにオダ君というのがいますが、彼は 40 歳になりました。彼は今年、神社で子ども食堂を始めたのです。彼は何で神社で始めたか。彼が子どものとき、いつも神社が子ども会の開催場所だったそうです。自分はいつもそこで遊んでいた。今 40 歳になって子どもができました。俺の子どもには行く場所がない。なので、こいつに行く場所をつくってやりたい。その行く場所は、自分が子どものとき遊んだあの神社であつたらいいな。なので、神主さんに一生懸命交渉して、その神社で子ども食堂をやるようにしたわけです。そういう感じです。

この問題は、ある一面は自治会の子ども会みたいなものですから、そっちの文脈で考えていただいてもいいのです。自治会の子ども会、随分減りましたよね。前はそこそこやっていたのかもしれない。だけど、これは都市部で聞いても、そしてどんな田舎で聞いても減ったと皆さん言います。もうなかなかできない。だけど、秋の祭りの子ども神輿はある。それを絶やすことだけはしたくない。なので、毎年、共働きのご夫婦ばかりなのだけど、誰かつかまえて、輪番で、拝み倒して、何とかかんとか、とにかくそこだけは死守している。けどもそれ以上なんてとてもとても頼めない。それ以上何かやってくれなんて言ったら本当に引き受け手がいなくなってしまう。なので、最低限を死守するので精いっぱいだというような話を全国どこでも聞くので、茨城も似たようなものではないかと思うのですけれども。

そういうときに、自治会の子ども会はそのまま復活しないかもしれないけど、そういうにぎわいをつくっていきませんか。そういうにぎわいをつくって行って、多世代の人が出会うような場所をつくっていきませんか。そういう場所があったほうが子ども

の声が聞こえる町になるし、にぎやかになるし、地域の人と子どもの接点も生まれて安心できる地域になるし、そういうものがどんどんなくなっていくと、保育園を建てるのはけしからんとか、子どもの声が騒音に聞こえるとか、そういうわけのわからん話が当たり前のようになっていくのではないかなって思う。そういう文脈で語っていたことも十分可能だということです。

ただし、それは子どもの貧困対策と無縁ではありませんよということです。そこも大事なポイントなので押さえておいていただきたい。

みんなが青信号の顔をして来られる場所です。だから、楽しそうに飯を食って、楽しそうに騒いで帰ります。何だ、みんな、何の問題もないじゃないかとぱっと見たら思います。ではそれは関係ないではないかと。子ども会をやるのは結構だが、少なくとも子どもの貧困問題とは関係ないよねと言う人がいます。そんなことはありません。

何が違うのかということを今からお話ししますが、貧困というのは、さっき言いましたお金がなく、つながりがなく、結果として自信がないという状態です。子ども食堂や子どもの居場所ではお金は配りません。なので、お金の面では役に立っていません。それはおっしゃるとおり。だけど、貧困というのはお金がないだけの問題ではありません。貧困と貧乏は違います。貧乏というのはお金がないことですが、貧困というのは、お金がなく、またつながりがなく、さっきのお葬式に行けないことから周囲とおつき合いのないひとり暮らしや高齢者が生まれるとか、修学旅行へ行けないことからクラスでぼっちが生まれるという流れを意識していただければ、経済的な厳しさが孤立に結びついていくという道筋が見えると思います。つながりがなくということを含みます。

このつながりのなさは民間で解決できます。子どもの居場所で、地域の人たちが出会うことで、交流することで。そして、そこから体験とか価値観とか人生の選択肢を増やすことにつながります。具体的に言いますと、子ども食堂で鍋をやったというときに、鍋を突つくって本当にあるんだねと言った高校生の女の子がいました。鍋を突つくって本当にあるんだね。どういう意味かわかりますか。その子は高校生になるまで鍋を突つくという体験を、家族の団らんを、食卓の団らんを家庭で体験したことがなかったわけです。テレビでは「ゆずポン」のCMとかで見たことがあった。ではあれは何だと思って見ていたかということ、フィクションだと思って見ていた。確かにテレビの中では人が空飛んだりしますからね。フィクションだと思って見ていたんだが、そうしたら目の前でみんなが鍋を突き出したわけです。あら、これ本当にあるんだと言ってしまったという話です。

このとき彼女は鍋を食いました。なので、1,000キロカロリーぐらい摂取しましたが、もう一個大事なものを摂取しています。それは自分の家庭は普通と違うところがあるのかもしれないという気づきです。自分が驚いたことで、多分、周りの大人たちは驚いた

でしょうね。あれ、そこで驚くって。それを見てまた彼女は驚いたはずなのです。あれ、これ驚かれることなんだと。そういう感じだったと思います。あれ、ではこれはみんなにとっては普通のことなのということになるわけです。それが自分の家庭を相対化するきっかけになります。子どもにとってはこれが極めて大きなことです。自分の家庭を相対化するというのは本当に難しいです。大人でも難しいです。だから貧困も虐待も連鎖していつています。自分が小さいころに親から受けた扱いをなかなか本当の意味で断ち切れないから、なので自分の子どもにも同じように対応してしまう。そうすると虐待が連鎖します。貧困が連鎖します。貧困の連鎖を断ち切ろう、虐待の連鎖を断ち切ろう、もう 10 年前から、もっと前から繰り返し何百回も何千回も言われているけれども簡単に断ち切れません。それぐらい難しいことです。なので、子どもにとってはさらに難しい。

私の話で恐縮ですが、私のうちは両親が共働きで、とても実務的な家庭だったのです。なので、うちは毎週水曜日の夜はカレーなのです。水曜日の夜、カレー以外のものは出てこないのです。青菜といえばほうれん草なのです。小松菜も春菊も出てこないのです。ほうれん草といえばおひたしなのです。ほうれん草のバターソテーとか見たことも食ったこともなかった。青菜の栄養価が必要なのだったらほうれん草のおひたしを食べていれば大丈夫だよねというのがうちの親の発想です。ある意味そのとおりです。極めて合理的です。そういう親でした。

私にとってはそれが普通でしたので、たまには小松菜を食いてえと言ったことはないです。ほうれん草のバターソテーを食わせろと言ったことがないです。それが私にとっての普通だったから。なので、小さいころ不思議でしょうがなかったことは、何できょう月曜日なのにハウスバーモントカレーのCMやるんだろうと、これが不思議でしょうがなかった。水曜日にやらないか意味ないだろうと思っていたのです。バカじゃないかと思っていたのです。テレビのほうがおかしいと思ってしまうのね。そんなもんですよ。皆さんも都合よく忘れていてだけで、そうだったはずなのです。なので、自分ちを相対化するというのは本当に難しいのです。ですので、その子が、うちってちょっと普通と違うところがある家庭かもしれないと気づけたというのは極めて大きなことなのです。

そして、それが、彼女がほかの家庭はそうではないらしいということを知り、自分が家庭をつくるときには、ではみんなで鍋を突つけるような普通の家庭をつくりたい、そう思ったら、それが本当に貧困の連鎖を断ち切るということです。なので、鍋を食ったことが貧困の連鎖を断ち切る本丸だったということになります。ではこのときに、鍋を食うかわりに彼女に 10 万円を渡していたら彼女は必ずそう思うようになるか。なるとは限りません。なので、体験というのはお金以上の価値を持つことがあるわけです。

大事なことは、これは狙ってできないということです。狙ってできません。そのとき

の大人たちは、きょうは鍋にしてあの子を驚かせてやろうと思って鍋をつくっていないです。鍋をつくったら、食ったら、その子が驚いたのです。それを見て大人たちも驚いたのです。狙って打ち込めません。私とあなたの当たり前は違うので、あなたがどこで驚くのか私にはわかりません。私には普通のことをやっているつもりなのに、やたらと奇妙がられたり、おもしろがられたり、時には怒られたりします。それは私とあなたが違う人間だから起こるのです。

これは我が子といえどもそうです。我が子のスイッチの入れ方がわかる人はいますか。いないでしょうね。我が孫だったら押し方がわかるという人はいますか。なかなかいないと思います。我が子、我が孫だといえど別の人間ですから、どうやったらやる気になってくれるのかわかりません。わからないので、世の親たちが何をやるかという、いろいろなことをやらせようとするのです。何をやっていいかわからない。だからいろいろなことをやろう。下手な鉄砲も数打ちゃ当たる。やってみなきゃ、打ってみなきゃ当たらないのだから、とにかくいろいろやらせてみよう。

なので、藤井聡太がすごいといえば、将棋をやってみるかと言うわけです。美宇ちゃん、美誠ちゃんがすごいといえば、卓球どうだと言ってみるわけです。そうやっていろいろやる中で、何かにヒットしてくれて、打ち込むものが見つかって、自分がやりがいになり、それが生き甲斐になってくれれば先に死んでも安心だと思えるから、とにかく何でもいから何かを見つけてほしい、そう思っているいろいろなことをやらせようとする。それと同じなので、それと同じことを地域の子たちにもできる範囲でやればいいですよということなんです。

なので、別に子どもの居場所というのは子ども食堂だけではありませんから、将棋の得意な人は一緒に将棋を打てばいいのです。テニスの得意な人は一緒にテニスをやればいいのです。バーベキューが得意な人は一緒にバーベキューをやればいいのです。キャンプをするのが好きな人はどこかへ一緒にキャンプに行けばいいのです。

この間、新潟に行ったときに、新潟の自然体験学校をやっている人が言いました。ついに出来ました。何が出たんだと思ったら、飯ごう炊飯とかやりますから、昔から調理をやるわけですが、昔から包丁を使えない子はいた。ところが、何年前から包丁を見たことがないという子が出てきた。そしてついに出たんだと。何が。この間、小学校5年生の男の子が、包丁って何って聞いてきたというのです。その子は一緒に飯ごう炊飯をやって、包丁は何かを知ることが驚きですよ。それは狙ってできません。まさか包丁のことがわからないとは思わないから。でも、世の中にはそういう子が現実にいるわけです。そうなったときに、その体験と一緒にすることがその子にとっては大きな体験になるわけです。それが人生の価値観を増やしたり選択肢を増やしたりするわけです。それが人の豊かさです。

私は兄が障害者です。兄のためにうちにはボランティアの人が出入りしてくれていました。兄のために来てくれるのですが、私も一緒に遊んでもらいました。私が初めて大学生というのに会ったのは兄のボランティアとして来てくれた人です。これが大学生というものかと思いました。親とも違う。学校の先生とも違う。一緒に遊ぶ近所の兄ちゃん、姉ちゃんとも違う。大人でもないし子どもでもない。新しい生き物に会ったという感じがしました。何が違うってよくわからないけど何か違う。強いて言うと肌つやが違う。体のきれが違う。何かとにかく新しい生き物だと思いました。

その後しばらく私は大学生と聞けば思い浮かべるのはその人だった。その人を介してそれが私を大学というものと結びつけていたのです。世の中には自分は大学なんかと一生関係がないと思っている子がいます。親も行っていない。じいちゃん、ばあちゃんも行っていない。みんな口をそろえて行く必要ないと言う。そんな世界は俺には全く無縁だと思っていたら目の前に大学生があらわれた。へー、これが大学生というものかと。あら、何だこんなもんかと。これで大学生なんだ。じゃあ俺もなれるかもしれないと思うかもしれません。それが人生の選択肢が一つ増えるということです。結果的に行くかどうかはどうでもいいです。ただ、その選択肢が自分の中にあるかないかと思えることが決定的です。そういう選択肢があると思えるようになるということが、人生としての、人としての豊かさです。

クリスチャンという人に初めて会ったのも兄貴のボランティアとして来てくれた人です。食事のときにお祈りなんかしちゃったりして、わっ、テレビドラマと一緒にと思いました。その人は男性でした。男性だったんだけど、プリンをつくってくれました。プリンをつくるのが得意でね。うちの父親は一切料理をしない人でしたから、男で料理をする人がいるのだというのは驚きでした。私はあの人に会わなければ、そのまま大人になったら、男で料理をするなんておかしいと感じる大人になっていたかもしれません。でも、そういう人と出会いがあって、男で料理をするってありなのだと思っている大人になったので、私にとって料理をすることはそんなに特別なことではないです。むしろちょっと格好いいことという感じがします。そういう印象は、その人と出会ったおかげで私の中にその価値観としてストックされました。

子どもは、皆さんが今みたいにネクタイをしめてスーツを着ていくだけで驚きます。わっ、これが働いている人というものかと。何だこんなもんかと思うかもしれません。俺だって働けるはずだと思うかもしれない。それが人生の価値観を変えるのです。そのままの格好で行けばいいのです。

明治安田生命は、3年間、社員を2週に一遍、必ず近くの子ども食堂に送り続けます。そういうことが、実はその人たちは特別なことを何もしなくても大事です。そこにいる子たちの驚きなのです。子どもたちは言いませんよ。私は大学生に会ったときに、

新しい生き物だね、あんたと言いませんでした。クリスチャンの人はタカノさんというのですが、タカノさんがプリンをつくってくれたときに、男でも料理する人いるんだねと言いませんでした。言いませんが、自分の中にストックされていくのです。そして40年たっていますが、覚えているのです。

なので、そういうことは言わないでしょう。みんな私は青信号でございますという顔をして飯を食っているでしょう。何も困っていることなんてありませんよという顔をしているでしょう。そうやって帰って行くでしょう。だけど、そういうことの一つ一つが大事なのです。それを通じて何かの拍子にわかるのです。その子が驚いたことを通じて、あっ、この子ってそういう家庭なんだなってね。大人たちも言いませんよ。ああ、あんたんち大変だったんだねとか言いません。だけど、それとなく気にしておいて、その子との普段の会話により一層注意するとか、親御さんと会ったときにそれとなく話にしてみるとか、そのようにして必要なときに支援につなげたりするわけです。だから黄信号対応をしているし、やっているし、そういう場所だから行けるし、だから大事なのです。

そういう意味では、さっきの包丁の話などは学習支援でもあります。考えてみていただければわかりますが、教科書は包丁が何かを説明してくれませんが、当たり前です。歩くって何か、人って何か、包丁って何か、服って何か、全部説明していたら教科書は辞典になってしまう。最低限の生活体験は持って上がってきているよねという大前提でつくられているのが教科書ですから、包丁については説明してくれませんが、ということは、その子は教科書を読んでもわからないということです。当然小学校1年生から学習は遅れていきます。なので、この子は包丁について知ってもらおうということは学習支援でもあるのですということです。

特別なことはやらないで結構だと言いました。学習支援なんていうと、私は言葉を変えたほうがいいかなと半分ぐらい思っているのですが、皆さん、決まって反応するのです。私、英語しゃべれませんか。あんたが英語しゃべれるかどうかなんて聞いていないし。因数分解忘れましたとすぐ言うのです。俺も忘れてるしという。そういう問題ではないのです。そういうことは聞いてないのです。

私がこの間、学習支援に行ったときにやったのは、小学校1年生の子たちが5人ぐらいで勉強してしまっていて、そこに混じってやりました。小学校1年生ですけれども、9月ぐらいでしたが、1人わからない子がいて、 $3 + 4 - 1$ みたいなのをやっているのですが、周りの子がみんな教えてしまうのです。ある子が言ったのです。こいつにはいつもこうしているんだって。仮にそいつの名前をショウタとしましょう。ショウタが解けないものだから周りの子たちがいわばショウタを構ってやるわけです。それでみんな教えてしまうわけです。半年の間にショウタもそれに慣れっこになってしまっているわけ。なので、私がやったのは、ショウタ、おまえな、人が蹴ったゴールでおまえの得点にな

んないだろう。おまえ自分でゴール蹴らないといかんだぞと言うと、何となく神妙な顔していました。それで周りの子たちには、今、ショウタがボールを蹴るから、おまえら待っているという話をして待たせた。私がやったのはそれですよ。3 + 4 - 1 はわからなくてもできる。そのようなことが大事だったりするわけです。そういうことを通じて自分で学ぶ大切さみたいなことをその子が身につけていけばいいわけでしょう。因数分解がわかるかどうかは問題ではないのです。そういう意味で、学習支援のハードルは、自分が難しい、忘れたことを思い出せと言っていることではありませんからねということです。

そのように考えてくると、必ず皆さんにできることはありますということになります。スーツを着て、ネクタイをしめて行っていただくだけで結構なのですから。

この間、児童養護施設の職員と話をしていたら、こう言っていました。児童養護施設に来た子が開口一番に言ったこと。床が見える。にんまりする人はわかっている人ですね。児童養護施設というのは世の中で一番大変な子が行くところです。親から虐待を受けたり、親がそもそもいなかったり、一番大変な子が行くはずのところなのですが、でも、そこに来た子が床が見えると言って驚いたのです。自分たちは床が見えないのです。物で、ごみで床が見えなくなっているのです。その環境が当たり前だったので、私のハウスパーマントカレーみたいなもので、床が見えるというのが驚きだったのです。ごみが拾えないという人はいますか。多分、ごみを拾っている大人を見たら、その子はとても驚くのですよ。これ拾うんだって。

なので、究極的に私たちはそれをいっただけ支援と言っております。いっただけで結構、特別なことしようとしなくて結構、いっただけで向こうが驚くときは勝手に驚くから安心してください。あなたにとって特別なことができるかどうかは聞いていません。あなたにとって特別なことはやらなくて結構、普通にしているだけで相手が驚き、それがその人の価値観になり、そして、それが選択肢を増やし、人生の選択肢になり、それがもしかしたら貧困の連鎖を本当に断ち切る革新的な意味を持つかもしれない。

子どもの支援というのは、貧困の連鎖を断ち切る、虐待の連鎖を断ち切ると言えますけれども、本当の真価がわかるのは20年後、30年後です。今の子どもが大人になったときに次の世代にどう接するかです。ここで断ち切れたかどうかわかります。今年支援をやれば来年学力は上がります。それは大事なことです、本当にそれが実を結ぶかどうかは検証できるのはそのときですから、なので、20年、30年スパンでやるものです。子どもに関することはそうですね。教育は国家100年の計と言うように、国や地域、社会の礎づくりですから、長いスパンで取り組むことなのです。そういうことで丁寧に積み上げていくべきものです。

ですから、4つ目、きょう言いました皆さんにできること、それは必ずあるというの

が私の確信というか保証なので、自分にはできないとか絶対にもう言わせませんからね。必ずできることはありますから、あとはやるかやらないかです。そういうつもりで考えてみていただきたいと思います。

そして最後、残りました伏線の2つ目、覚えていらっしゃるでしょうか。伏線の2つ目はこうでした。特に東日本大震災以降、地方に移住する若者が3倍に増えている。こういうことが起こっているということが伏線の2つ目だと言いました。一体今までの話の何がそこに関係していたのでしょうか。関係していました。共にあることの価値が上がっているということです。

こういう話を聞いたことがありますか。CDは売れなくなったが、ロックフェスティバルだのジャズフェスティバルだの、フェスティバルというものには人が集まるのだとか、あるいは、旅行会社がツアーを企画すると、体験型ツアーというものに人が集まるのだ、よく売れるのだとか、あるいは本屋が一角を潰してカフェコーナーをつくったらしいよとか、図書館が一角を潰して住民交流コーナーをつくったみたいだとか、これは子どもの居場所とも子ども食堂とも子どもの貧困とも全く無縁な場所で起こっていることですが、私は全て共通していると思っています。共通しているのは、共にあること、時間と空間と体験を共有することの価値が高まっているということです。

私たちは半世紀以上それをメリットよりもデメリットに注目して見ていました。確かに地域のしがらみは面倒くさい。煩わしい。変なおじさんが威張っているし、嫌だ。そういうことでどんどん捨ててきましたよね。そして、そういうしがらみなく生きていける便利な世の中を求めてきた。そのつながってあることのプラスよりも、それによる煩わしさのほう、マイナスのほうが大きかったから差し引きマイナスだったのです。

そうやって半世紀間捨ててきて、確かにものすごく便利になりました。パソコンさえあれば、スマホさえあれば、誰とも会わなくても暮らしていけます。そのような状態になったのだが、そうしてみるとちょっと寂しくもある。これだけネットを介して人とつながれるようになるとリアルに人とつながることがレアなことになってくる。価値あることにもなってくる。

というようにして、今でも確かに煩わしさ、面倒くささはあるのですけれども、でも、そのマイナスよりも、共にあることのプラスのほうがちょっと大きくなったのです。なので、昔は差し引きマイナスだったのだけど差し引きプラスになってきた。そこにこの間の災害がきいている。普通って物足りないことではなくてありがたいことなのだなという。みんなと一緒に家族で食卓を囲めるって、いつだって必ず保証されていることではないのだなという、そういう感覚がじわじわ来ています。なので、人との手応えを求めて地方に行くわけです。大都会の大企業で歯車をやっていると、誰のために、何の役に立っているのかいまいちわからない。手応えがわからない。何か役に立っているのだ

ろうけれども実感がわからない。もうちょっとサイズの小さいところ、クライアントが目の前にいるところ、自分のやったことのレスポンスがすぐ見えるところ、そして、かつ課題先進国日本の中でもとりわけ課題が集まっている課題先進地で自分がどこまでやれるか試してみたい、チャレンジしてみたい、そのように思っている人たちが増えています。それは体験とか共にあることの価値が上がってきているからです。

子ども食堂も全く同じ流れです。地域交流拠点づくりとかそういうのが、だから2年で2,000カ所になるのです。さっきこういうことは普通起こらないと言いました。普通起こらないことがなぜ起こるかという、時代に棹差しているからです。そうでなければお互いに何の連絡も取り合っていない、相互に全く見ず知らずの、何のノウハウも共有していない人たちが同時多発でそんなことをやらない。補助金も出ないのに、持ち出しなのに。この流れはしばらく止まらないと思っています。

それはまた話し出すと長いですが、そうしたことをしないと、そうしたことで支えていかないと、日本の財政面を考えても、人口構成を考えても、いろいろなことを考えても、地域と社会の持続性がないからです。そうしたつながりとかをつくって行って、黄信号と赤信号を絡むような地点でやっていかないと描けないからです。なので、それを理屈で感じている人もいれば、肌身で感じている人もいます。なので、地域のこぼれにくい地域づくりということを結果として人々がやり始めているということです。

SDGsがあるから子ども食堂を始めたという人は多分一人もいません。SDGsを聞いて、何かやらなきゃ、何をやればいいのか、では子ども食堂をやってみるかと思った人は一人もいないと思います。ただし、子ども食堂は、子どもの居場所はSDGsと同期しています。当たり前ですね。同じ世界を見ているからです。同じ世界の当事者だからです。地域のおばちゃんがこの同じ世界の現実を見ながら、自分でやれることは何かと考えてやり始めたのが子ども食堂です。国連の職員が世界の同じ現実を見ながら、国連でできることは何かと考えてつくったのがSDGsです。両方がこぼれにくい地域と社会と世界をつくろうということで同期する。ある意味当たり前のことなのです。

その現実を見ていない人が慌て出すのです。何か国連で決まったらいいぞ、やらなければいけないぞ、何やるのだ、おいおいというふうだね。そうではない。もうみんなやり始めている。なので、SDGsの芽は社会の中にあるのです。だって同じ世界の当事者なのだから。それが誰一人こぼれにくい、取り残さない社会、世界をつくろうというところでつながっている。

なので、この流れは日本だけのものではない、世界的なものです。そして、諸々考えても、当面変わりようがない。AIの発達とかという要素を入れても、共にあること、時間と体験と共有の価値観が高まるというこの現実是不変なものです。むしろAIの発達はそれを促進するでしょう。そのようになるとこの流れは変わらないので、この流れをい

かに確かなものにしていくかということが大事になってくるということになります。

平成が終わります。終わりますが、まだ平成の段階はこうしたものは萌芽的でした。今話したように、今私はつながるように話しましたが、余りつながるようには世の中は見られていません。今話した諸要素は見られていません。私はつながっていると思っています。ただ、それを誰にとってもつながっていると当たり前のものにしていくのが次の時代の私の仕事だと思っています。皆さんとしてもそうしたことに取り組んでいたければうれしいということをお話しして、私の話を終わりましょう。

* この講演録は、2018年11月13日に開催された茨城県労働者福祉協議会「2018年度勤労者福祉研究集会講演会」を茨城県地方自治研究センターが反訳・掲載したものです。

【資料】





人と人がふれあう

やさしくて、あったかい

にぎわいを

地域に創る

→地域交流の促進

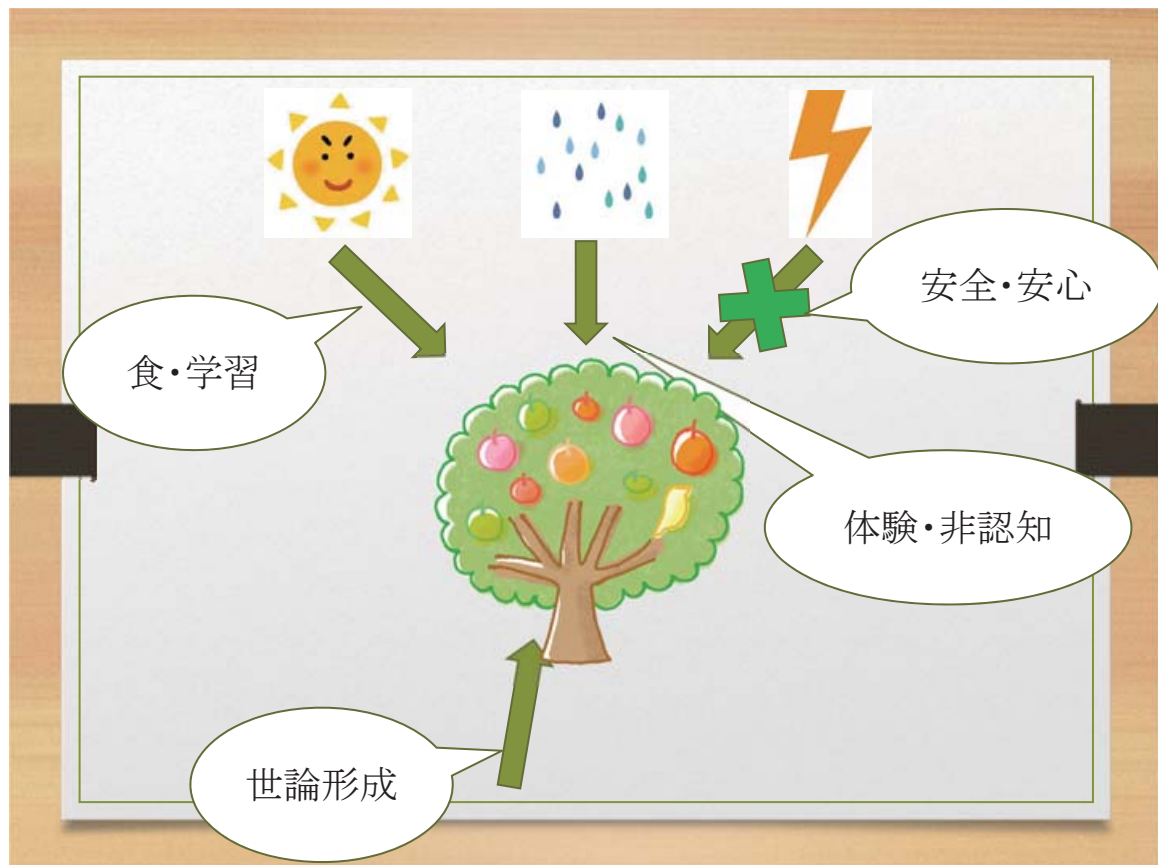
そのときに

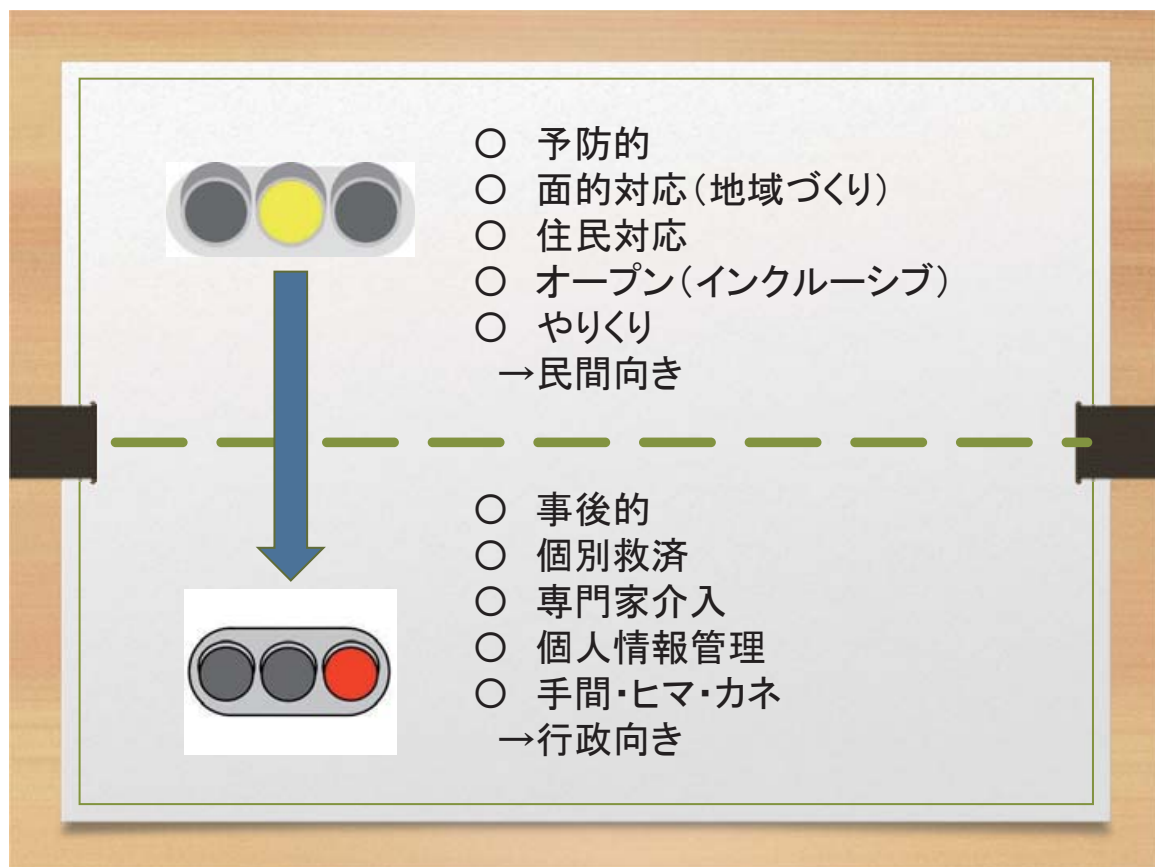
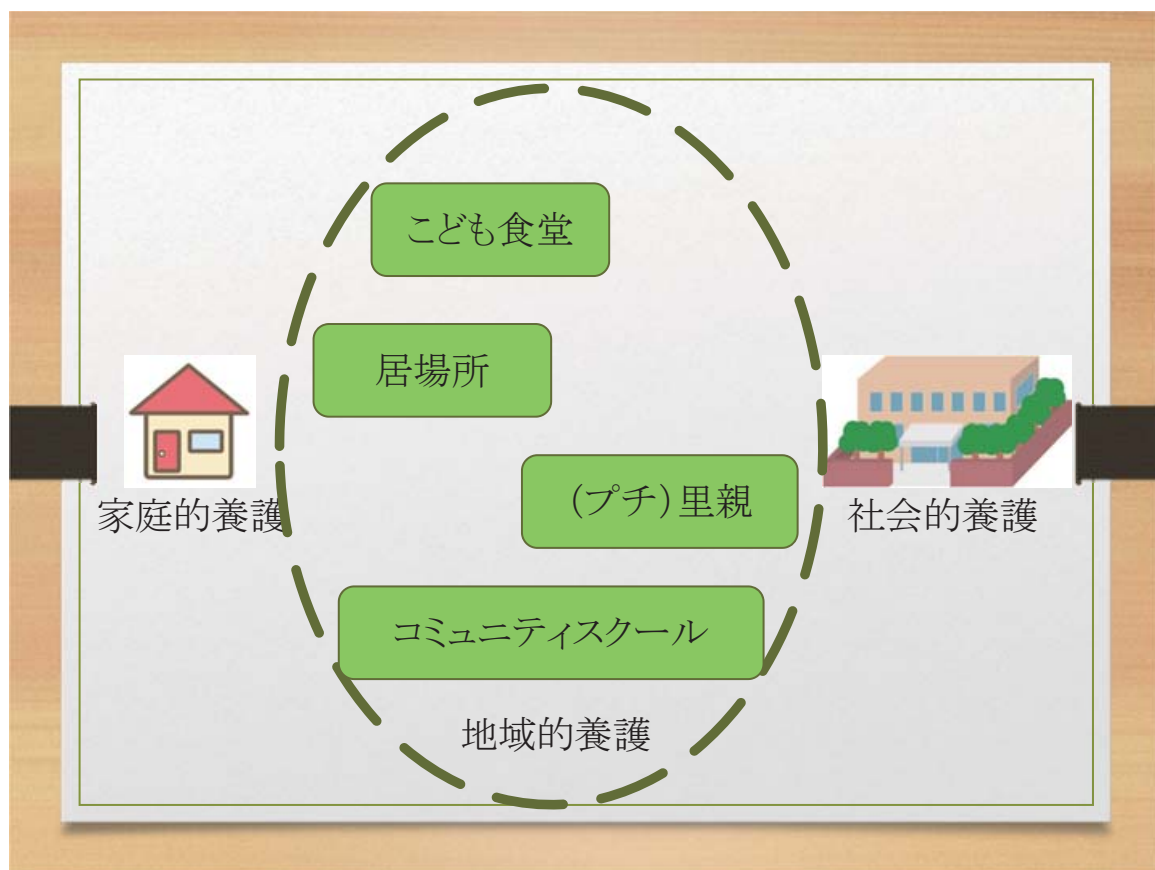
お金やつながりなく、

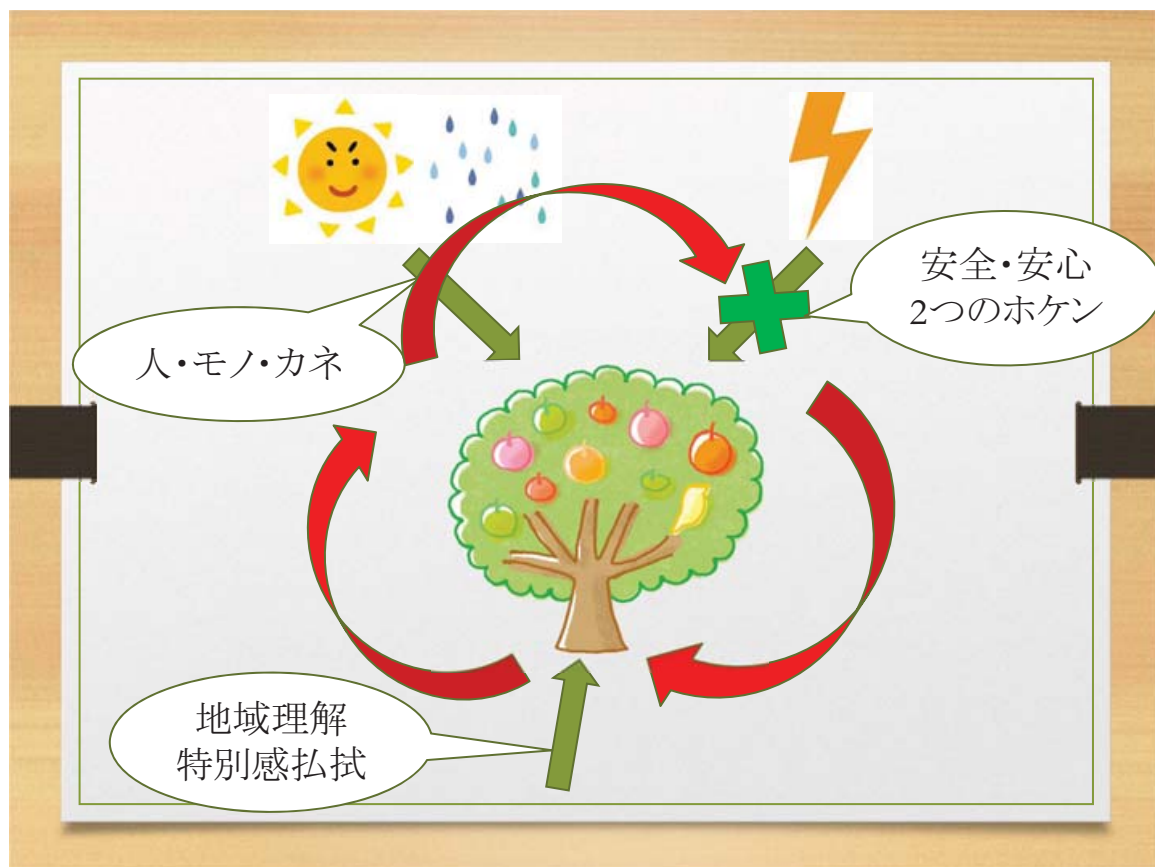
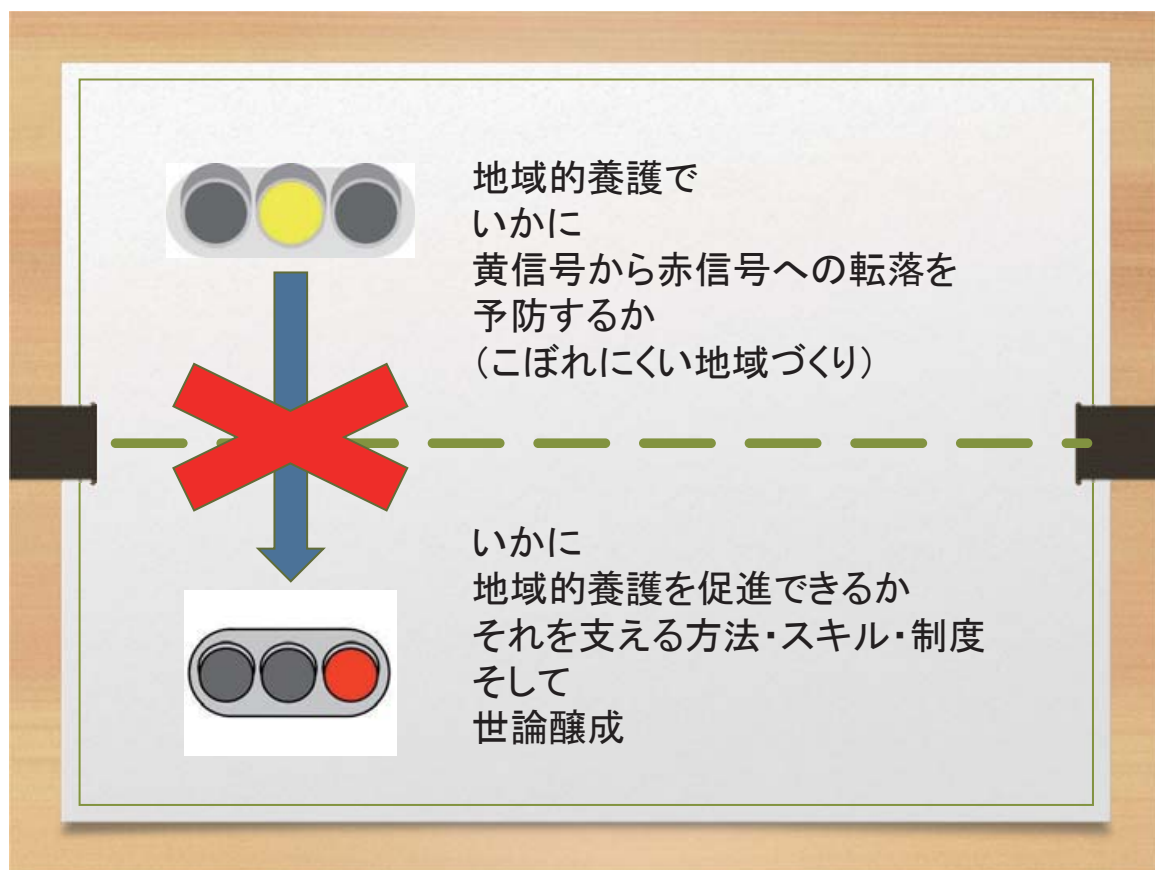
にぎわいからはじかれる

子どもを作ってはならない

→子どもの貧困対策







子ども食堂、フードバンク、学童保育に関する情報掲載にあたって

1. 当センターでは現在、笠間市における学童保育の現状と課題について調査検討を進めています。その中で、子ども食堂、フードバンク、学童保育といった取り組みは相互に関連しあっていることが多く、それぞれの取り組みの現状の把握は重要なテーマとなっています。そこで当センターとして、これらの取り組みの状況について、情報の収集と提供を行うこととしました。
2. 第1回目は、「茨城NPOセンター・コモンズ」が事務局となって実施した子ども食堂の調査結果などを掲載します。

茨城NPOセンター・コモンズ事務局長の大野覚さんによると、子ども食堂は直近では60か所に上っているとのこと（2019年初頭時点。2017年2月に「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー in茨城」を開催した際に、コモンズが実行委員会事務局を担い県内の子ども食堂の実態調査を行った時点での対象団体は16か所でした）。
3. 今後は、学童保育の状況などについて掲載する予定です。

茨城県内こども食堂 実態調査報告書



2017年2月

「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー in 茨城」実行委員会

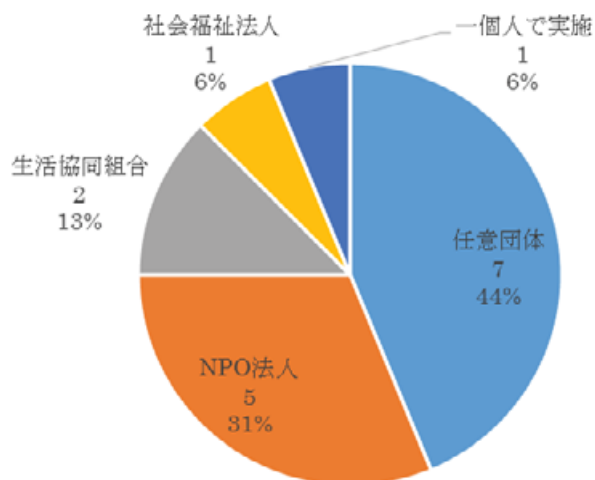
調査概要

目 的	「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー in 茨城」開催に併せて本調査を実施することで、既にこども食堂に取り組んでいる市民やこれからこの取り組みを行おうとする市民に対し、運営や活動の状況を具体的に共有するとともに、今後の同取り組みの支援の方向性を検討するための基礎情報とすることを目的とする。
対 象	茨城県内でこども食堂やそれに類似する活動を実施する団体 16 か所
対象期間	平成 29 年 1 月末～2 月中旬
方 法	e メールや郵送などによる書面調査
主 体	「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー in 茨城」実行委員会事務局 (認定 NPO 法人 茨城 NPO センター・コモンズ)
助 成	一般財団法人 茨城県労働者福祉基金協会 (2016 年度 NPO マナビヤ事業)
回答数	10 団体
回答率	62.5%

- 公開されている情報をもとに、回答のなかった団体分も含め、一部集計に加えた。

① 団体情報

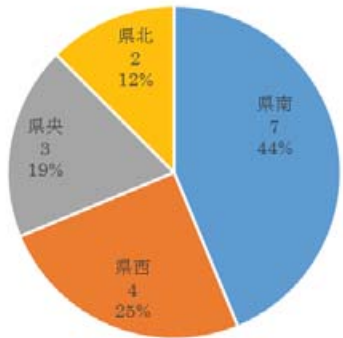
法人格



会員数

個人／団体	個人	団体
回答数	7 団体	6 団体
回答率	43.8%	37.5%
平 均	17 人	1.5 団体
最 大	47 人	9 団体
最 小	3 人	0 団体

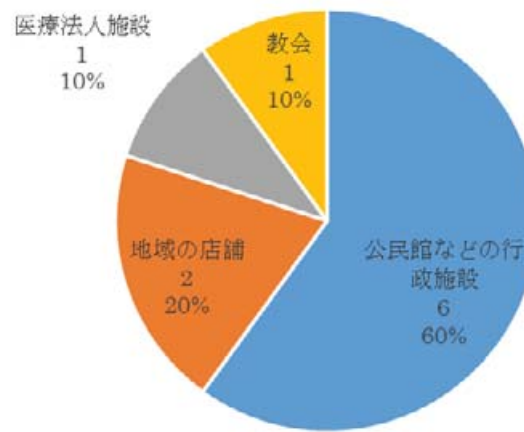
活動地域



② 活動場所

活動場所の種類

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



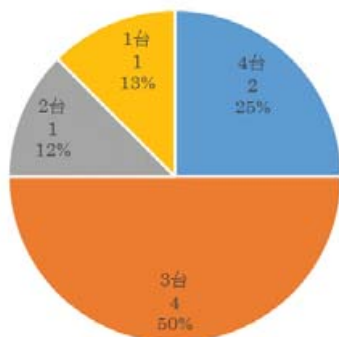
活動場所の情報

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



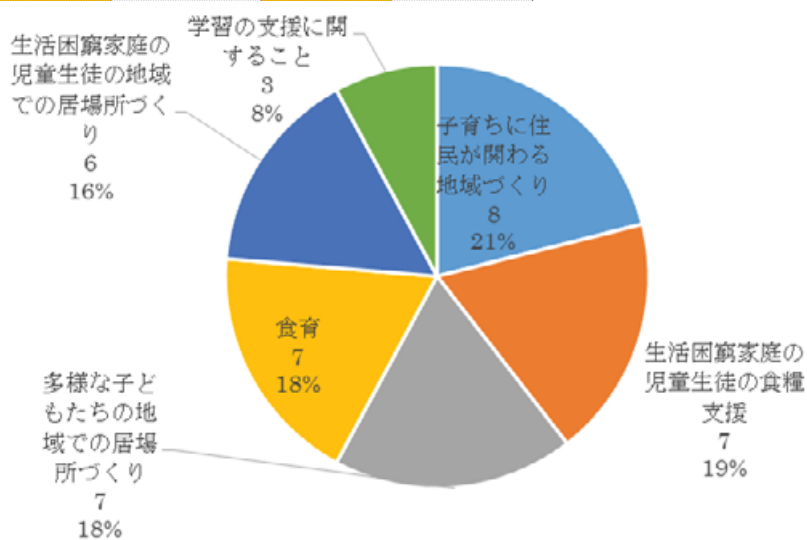
調理で使っているシンクの数

回答数	8 団体	回答率	50.0%
-----	------	-----	-------



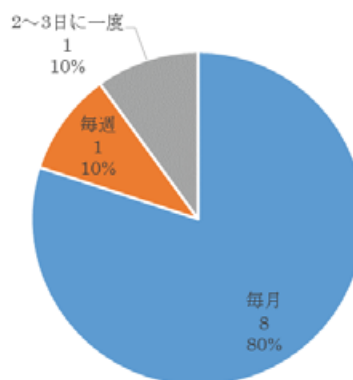
③ 主な活動目的(複数回答可)

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



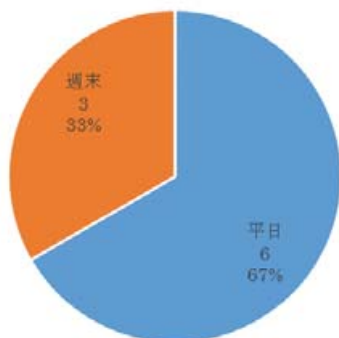
④ 開催頻度

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



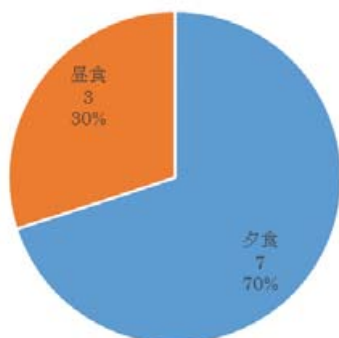
⑤ 開催曜日

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



⑥ 時間帯

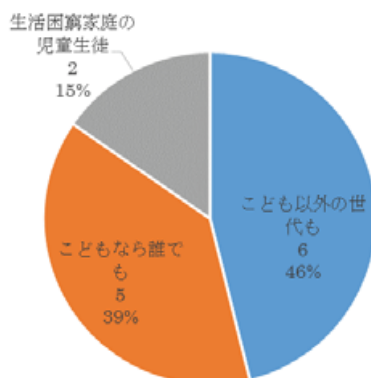
回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



⑦ 対象

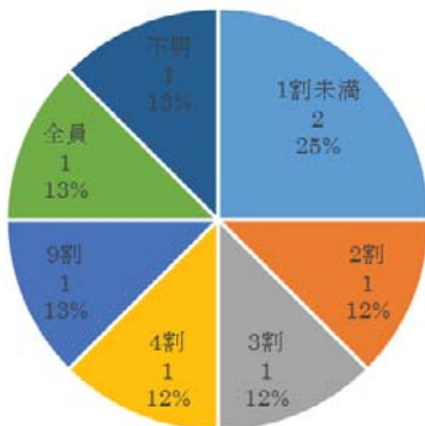
対象（複数回答可）

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



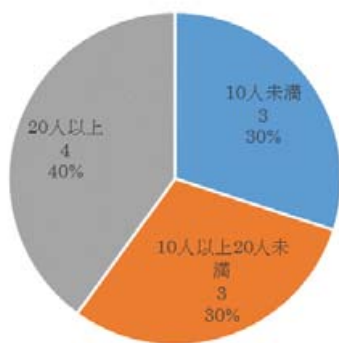
利用者のうち、生活困窮家庭の児童生徒と思われるこどもの割合

回答数	8 団体	回答率	50.0%
-----	------	-----	-------



各回のこどもの平均参加人数

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



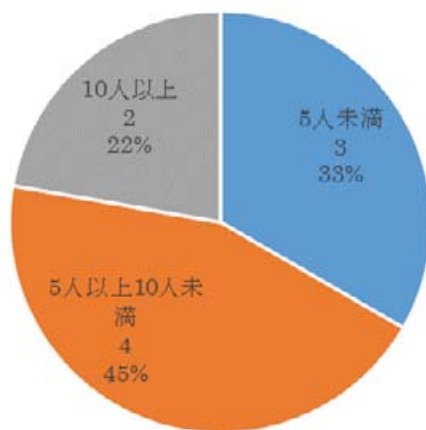
各回のこども以外の平均参加人数

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



⑧ 各回の平均ボランティア人数

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



⑨ 主な食事の内容

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------

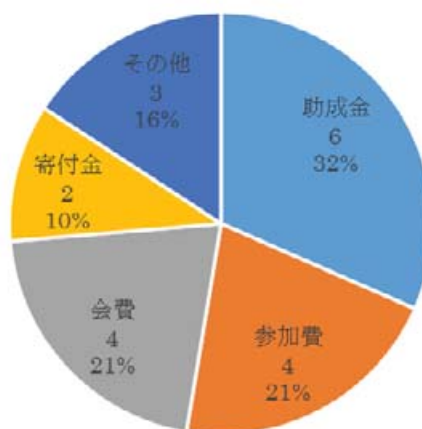
- ごはん・汁物・おかず・フルーツ・菓子（カレー・太巻き・ピラフ等）
- ごはん、主菜、副菜、香の物、汁物
- カレーライス、肉野菜炒め、オムライス
- おにぎり、おやつ
- ご飯、汁物、野菜料理、乳製品、ヤクルト
- 4 回とも週のメンバーが相談して作っている（重ならないように）
- カレー、スープ、おにぎり、ピザなど
- 地場野菜をふんだんに使った和食
- カレーライス、野菜の和え物、果物

⑩ 財政運営

活動財源（複数回答可）

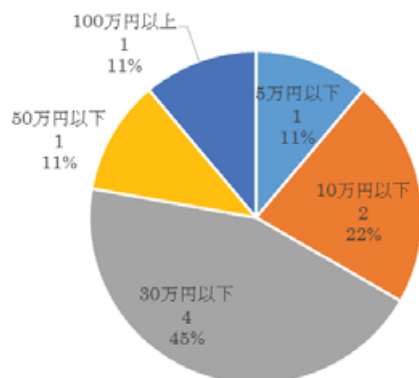
回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------

その他：物品寄付、送迎費、店舗でも売り上げ



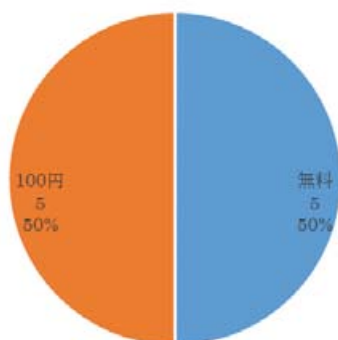
こども食堂の活動のみで計算した場合の年間の概算事業規模

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



こどもの参加費

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



その他：送迎希望者のみ 300 円

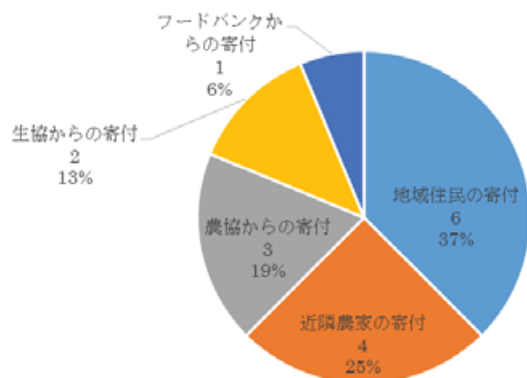
大人の参加費

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



食材の調達先

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



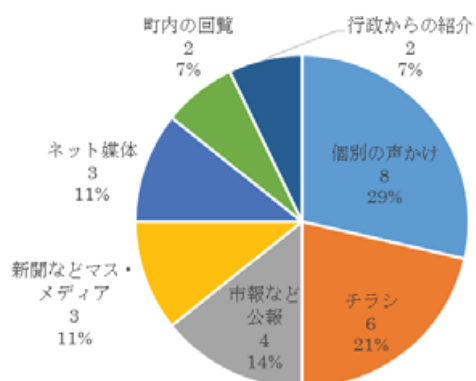
食材寄付を除いた 1 食あたりの材料費

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



⑪ 開催告知方法、こどもの集め方(複数回答可)

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------



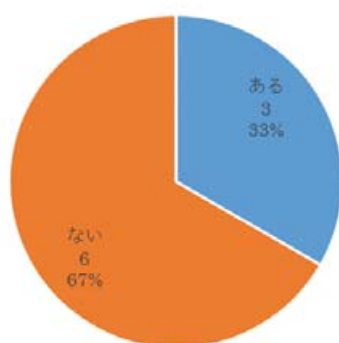
⑫ 連携団体と役割分担

回答数	7 団体	回答率	43.8%
-----	------	-----	-------

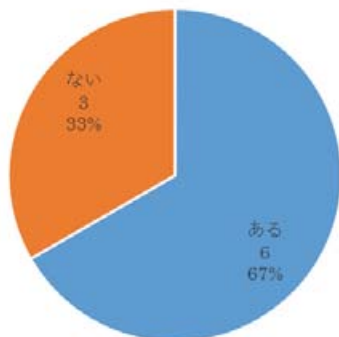
行政	● 相談、チラシ配布 ● 市の子育て支援関係課や社会福祉課による周知 ● 市による後援 ● 補助（平成 29 年度～）、広報
社会福祉協議会	● 広報協力 ● 共催または協力 ● ボランティア保険、フードバンクの紹介 ● 補助
NPO	● 子育て支援団体との連携 ● フードバンクからの食品提供
企業	● 乳製品企業などからの食品寄贈
生協	● 食材の提供、補助、運営のノウハウ情報提供
農協	● コメや野菜の無償提供、農協の直売所
メディア	● 広報協力
大学	● 学生にボランティア・スタッフとして関わってもらっている。調理、こどもの相手、学習支援に期待している
大学以外の学校	● 小学校、中学校との連携
自治会・町内会	● ボランティアでの協力
PTA	● ボランティアでの協力
その他	● つばさの会・都都逸の会・ガールスカウト・子ども劇場など女性団体との連携 ● ライオンズクラブ、フードバンク、県や市議会議員との連携 ● 病院：開催場所提供

⑬ 他の子ども食堂とのネットワーク

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



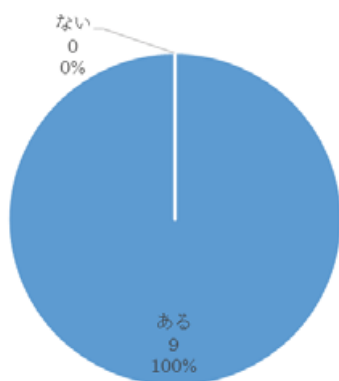
⑭ 食品衛生関係など、行っている行政機関への届け出



保健所への営業許可

⑮ 付保している保険

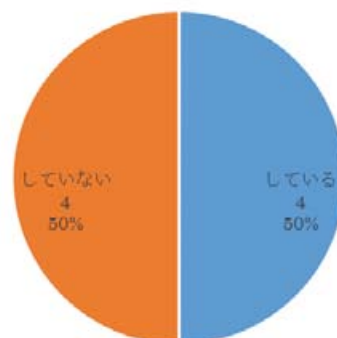
回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------



ボランティア保険、施設所有者自賠償保険、飲食物危険保償特約、スポーツ保険、組合員活動保険

⑯ アレルギーなどの対策

回答数	8 団体	回答率	50.0%
-----	------	-----	-------



個人的に聞いているだけ

⑰ こども食堂を始めたきっかけ

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------

- 退職教師が無料塾を立ち上げた。その支援と地域の住民や子育て世代・高齢者の交流の場。大好きいばらき県民会議から助成受けられたこと
- 生協が目指す「誰もが安心してくらせる地域社会づくり」のために、これまで取り組んできた高齢者向けサロンの他に、地域の共食「子どもも安心して過ごせる居場所」づくりを進めようと考えた
- PTA 活動やママ友と話す中で孤育をを考えさせられる場面があり、何かできないかと始めることとなりました
- 学童保育を弊所は行っているが、そこで父子家庭のお子様を預かったことから、無料塾の必要性を感じてから、3年後に実施
- 自分の子育てが一段落した為、現在子育てや仕事に頑張る家庭や、お母さん子ども達を食の面からサポートしたいと考えた
- 地元産の豊富な農作物を、手製で調理し皆で頂く機会を家庭以外で提供したいと思った
- 地域お母さん達や世代の違う方々とコミュニティの場を作りたいと思った。
- 全国的に貧困家庭が増加している現実から目をそらす孤食のこどもたちに温かい夕食をごちそうすることから始めた
- テレビの放送
- NHK ニュースを観ていたところ、「こども食堂」をテーマにした特集がやっており、その存在をしりました。物があふれる豊かな時代に、貧困で食事がとれない子供達がいる事に驚愕いたしました。そして、自分にも同じ世代の子どもがおりますので、とても切ない気持ちにもなり、何か出来ないかと悩んだ末、立上げのきっかけとなりました
- 取り組みがメディアなどで取り上げられ、関心に向けていたところ、いばらきコープから実施の誘いがあった（県北エリアでの実施）

⑱ こども食堂を実施する上で大切にしていること

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------

- あいさつ・季節感・行事・ごはんをメニューの主にする。自主的に片付け手伝いできるようにする
- 参加者がお客様にならないように、地域全体での自主運営を目指していること
- 誰もが安心して過ごせる居場所となる事
- 公共施設を使っていますが、気持ちは大きな家庭です
- おいしさ、栄養素のバランス、料理のバランス、食材。子どもたちが野菜を食べるように、スープのように料理して野菜感を消す工夫をしている。また、ボランティアと寄付の充実を工夫している
- 子供達の居場所としてはもちろん、と同時に、社会に通用する学力を身につけ、狭い世界から広い視野を持てるよう情報を取ることで自信をつけさせてあげたいと思っている
- 安心安全、衛生管理
- 来て頂いた方と食堂スタッフの近距離感
- 「安価な食堂」や「イベント」では無く「日常の一食になる事」を望み、ステイタスを持つこと
- 手製の食事を提供する
- ほっとした温かい心で帰えられるように心がける
- 個人的情報は秘密保持する
- 会員のチームワーク作りを大切にすること
- どのこどもも同じように接すること
- 私たち主催者側が、日常生活に無理のない活動計画で、尚且つ長期的に確実に開催できること
- 参加者が職や交流を通じてくつろげる居場所づくり
- 食育（地元の野菜など）

⑲ こども食堂を始めて良かったと思うこと

回答数	8 団体	回答率	50.0%
-----	------	-----	-------

- 先生や子どもたちから喜ばれる。スタッフや利用者と情報交換できる
- 一言、子どもが喜んでいる
- 最初は、能面のような表情の子供達が、だんだん屈託無い笑顔を見せてくれるようになってきたことや、話しかけてくれるようになってきていることなど、また、不登校だった子が、学校に行けるようになったことなど、子

- 供達の成長、変化を見ているとやってよかったと実感している
- 集客策が足りず、まだ僅かなお客様数の為スタッフがお客様と一緒に食事をしてお話を伺う事が出来ます。初めて来店される方でも、開催や取組を喜んで下さり、必要とされている実感を得ることができます。
- 子育てが一段落したお母さん達は、ボランティアを望んでいたがその先を探していた。調理手段のボランティアの機会を得て、お母さん達の居場所の1ヶ所になったこと
- 来店する子どもたちの表情が明るくなってきたし同伴する母親もホッと出来るといってくれてうれしい
- 会員たちの仲間意識が深まって来たりやりがいを感じつつある
- いろいろな方面でご協力者が増え、こども劇場や紙芝居などもボランティアで来てくださること
- 始めてみると、子育て世代の若いママさん達の利用が多く、貧困！？と、いうよりは、子育て応援！！と、いう感じで楽しくもあり、ボランティア側も若い世代と関わる事で刺激にもなり、また、逆にボランティア側の居場所にもなって来ています
- ボランティアと参加者、参加者同士の交流が、世代を超えて深まった

②0 こども食堂を通じて印象に残っているエピソード

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------

- 食事する各テーブルに自宅から野の花を持ってきて飾っていた。子どもが花のあるところに座るんだよ！と新しい人に案内してくれたこと
- 洗い物を進んでやってくれた男子
- 重陽の節句に囚んだ菊の菓子をもったいない！きれい！と大事にそうに持って帰った女子
- 参加している人たちが顔見知りになりハイタッチして挨拶しあっていること
- 学習支援をしてきている高校生が食器運びや配膳も積極的に協力してくれていること
- おばあ様世代のボランティアさんに3さいの子どもが「美味しかった」とボランティアさんも泣きそうなほど喜んでいて
- 長く学校に行っていなかった子が、うちに来出して、4ヶ月目に学校に行き出してくれたことが、とても嬉しい
- 50代男のお客様がお1人で来店されました。お手製の野菜中心の食事をとても喜んで下さり、また食堂の主旨に賛同もしてくれました。お帰りになる際、「この食事を家に居るおふくろにも食べさせたいな」とおっしゃいました。きっと幼少の頃からお母様が一生懸命食事を作り、食べさせてくれたのでしょう。その思い出はやがてこの様な親孝行な優しいお気持ちを生むのだと教わりました
- 偏食のある4才の男の子が始めてシチューを食べたと母親が喜んでいて
- 6〜7kmを自転車で食べに来る子どもがいるので、ごはんをたくさん食べてもらうように持たせたことです
- 利用者さんから、「子供が食べられなかった野菜を食べてくれた！！」、「私も子供も、ラッキョウ！を、初めて食べました。」、「美味しかったので料理のレシピを教えてください。」など、言葉を頂き嬉しかったです
- 食材を提供してくれている近隣農家が、参加者（子どもたち）に食の大切さの話を聞かせてくれた

②1 団体や個人として、意識が変化したこと

回答数	8 団体	回答率	50.0%
-----	------	-----	-------

- 継続に何か必要か個々で考えてくれるようになった
- さらに必要性を感じる
- もっと学習に入るまでに、時間をかけないとならないかと思っていたが、だんだんすんなり学習に入ることが、できるようになったことが意外だった
- 人の一食を作るのは、誰が作って食べさせても良いと思えた
- 人の繋がりには、縦横・斜めの関係の人がおりどの関係性の人でも、一助になれると感じた。
- 子どもたちの置かれている場所は不安定な環境であり、増々心のよりどころのない子どもたちが多くなることを実感し、やりがいのある活動だと強く思うようになった
- 自分の子どもを育てるときにはわからなかったことが、子どもたちを通して社会全体を見るようになりました
- 調理の際に、ボランティアさん達は、自宅で調理する感覚で気軽に取り組んでいましたが、利用者さんが増えるごとに、事故防止、衛生

- 管理の意識が高まってきた事
- 高校生などの若い世代も「子どもの貧困」といった社会現象を重くとらえ、ボランティア

として参加、協力してくれており、心強く感じている

②② 子ども食堂を実施する上で、社会的に課題と感じていること

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------

- 気兼ねなく利用してもらうためにはどのような PR すればよいか。貧困を前面に出すわけにはいかない。いじめにつながる
- 子ども食堂はきっかけであり、地域のコミュニティづくりに地域住民の方々が問題意識を持つことが大切である
- みんな、子どもの事を大切に思っているので、仲良く進んでいきたいです
- 現在、NPO で運営しているため、市が行なっている事業ではない、ということで、交流センターも有料でお借りしている。どこが運営していようと、事業内容を精査した上で、考慮していただけたらと思っている。また、これを全国的に広げるためには、行政との連

- 携が必要であるが、現状はまだ市としては、理解が少ないと思う
- 本当に困っている家族に届ける為、アプローチの仕方
- 口コミの PR なのでなかなか来店客が増えないので地道な PR をしていくことそして地域の人々の意識が変わっていくことが大事と思う
- やはり市行政の協力が必要
- 地域性が大きく影響していると思いますが、子供食堂＝貧困と、イメージされがちなので、地方の小人口地域では、本当に利用したい方が利用しづらい状態だと思います
- 今のところ特にありません

②③ 子ども食堂を実施する上で運営面で課題と感じていること

回答数	10 団体	回答率	62.5%
-----	-------	-----	-------

- 人・物・金
- 主体的に関わる人を増やす努力を生協や行政、社協など力を合わせていくことが必要
- まだまだ、これからなので、課題だらけです
- 必要な子供に如何に届けることができるか
- この市の地で、学習支援を行なっていくには、マンパワーがやはり必要。現在は、弊社の少人数でサポートしていることがほとんどだったが、今年に入って、おにぎりを握ってくれる女性経営者団体などがサポートをしてくれるようになって来た。しかし、送迎ボランティアや学習指導ボランティアが不足している

- ことや、人件費や車両代などの負担もあるので、運営費を安定して確保することは、課題である
- 運営資金
- 顧客の集客（来て欲しい顧客へのアプローチ）
- 補助金は今年度 1 回限りなので寄付金を集めることが頭痛いところである
- 食材の確保が第一
- ボランティア会員を増やして行きたいです
- 差別感なく、いかに本来の参加者（生活困窮世帯の子など）を利用につなげるか

②④ 子ども食堂以外に併せて行っている活動

回答数	9 団体	回答率	56.3%
-----	------	-----	-------

- 男女共同参画 市と連携し大人の社会科見学等実施
- 学校や幼稚園に向けた食育教室（年間約 40 ケ所）、その他に減災・環境教室。 協力：茨城県生涯学習課
- 茨城県の農業を応援する「茨城をたべよう！ キッズ・マルシェ」 協力：JA グループ、茨城県農林水産部
- 学習支援活動、自由活動

- 福祉施設へのボランティア（ミュージックケアなど）の訪問
- 小学生対象の学童クラブを元々から運営中。
- 今後の希望として、学習支援をされている団体の活動日に 1 食（昼または夜食）を提供する事。食事の前後に読み聞かせや食育 WS を実施したいと希望しています
- 子どもと学生ボランティア、交流のためのボランティアなどとの交流の時間を設けている

子ども食堂について考えるボランティア養成講座 「県内の子ども食堂などの概況」

日時:平成30年11月8日(木)

会場:東海村総合福祉センター絆 多目的ホール

認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ 事務局長

NPO法人 フードバンク茨城 理事長

大野 覚(オオノ サトシ)

電話:029-300-4321 eメール:info@npocommons.org



茨城NPOセンター・コモンズとは

社会的な役割 (ミッション)	セーフティネットづくりに取り組む活動を支え、ネットワーク化し、または自ら取り組んで、その芽を育てること、また地域における民間非営利団体の活動基盤の充実を図ること					
対象	ひきこもりがちな市民	子ども	外国人	被災者	高齢者	障がい者
事業の柱	上記の市民を支える、地域社会の団体					
① セーフティネットのインキュベーション	グッジョブセンターみとやいばらき若者サポートステーションによる就労支援	コモンズ・グローバルセンターによる多文化保育や学童保育、学習支援、キャリア支援の実施		たすけあいセンター「JUNTOS」による居場所づくり、移動支援		一般社団法人 グローバルセンター・コモンズによる就労支援のモデルづくり
① ネットワーク化	地域を構成する多様な組織の連携の機会づくり	子ども食堂や無料塾のネットワーク化支援	教育機関をつなぐ地域円卓会議の実施	災害時の特殊ニーズに対応するための、福祉団体のネットワーク化	自治体やNPOなどによる生活支援体制整備の支援	福祉避難所づくりを通じた障がい者支援団体のネットワーク化
① 担い手の育成	ジョブトレーナーの育成、親の会やひきこもり支援に関わる団体の運営支援	子ども食堂や無料塾の運営支援	外国人による当事者組織や常総市国際交流協会の設立支援	防災訓練や常総の水害の経験を活かしたワークショップの実施	茨城NPO事務支援センターによるNPOなどへの会計支援	
① 活動資源の仲介	いばらき未来基金によるNPOなどへの助成と伴走支援			JUNTOS募金やホープ募金(いばらき未来基金内の被災者支援活動のための基金)	遺贈寄付の推進	いばらき未来基金によるNPOなどへの助成と伴走支援

子ども食堂の類型(1/2)

類型	地域共生型	セーフティネット型
目的	- 居場所づくり - 孤食を防ぐ - 多世代交流 - 食育 - 忙しい親の支援（たまには食事づくりから解放） - 子育てに関わる地域づくり - できれば生活困窮の子どもたちの支えになりたい	- 食料の支援 - 同じ悩みを持った子ども同士が、悩みを打ち明けられる居場所づくり - 生活困窮の課題対応 - 他機関の支援につなげる - 一人一人の課題に向き合った支援（ケースワーク）
対象	主に子どもだが、世帯所得、年齢を問わず	生活困窮家庭の子どもがほとんど（当事者性が強い）
定員	100名を超えることも	一人一人に寄り添うため、多くて20名
地域に対する開かれ方	オープン	クローズド（活動場所も非公開の場合あり）
参加費	徴収する	徴収してもわずか
公的機関との連携	あまり強くない	強い
雰囲気	明るく、楽しい	一見楽しいが、一人一人の課題は複雑、深刻

子ども食堂の類型(2/2)

類型	地域共生型	セーフティネット型
取り組みやすさ	割と簡単	子どもの課題に本気で向き合う覚悟が必要
団体数	多い（約8割）	少ない（約2割）
開催頻度	少ない（月1回が多い）	多い（週に複数回）
専門性	あまり問われない	問われる
主体	任意団体が多い	NPO法人が多い
スタッフ	ボランティアがほとんど	有給職員もいる
経費	年間30万円もあればできる	100万円を超えることも
似た活動	プレーパーク	無料塾
課題	- 本当はニーズの高い子どもを支援したいが、いるかどうかかわからない（行政、学校や社協と緊密に連携できるか） - 来やすさを重視するため、「子ども食堂＝貧困」のイメージは困る。	貧困の「レッテル貼り」（スティグマ）とならずに、必要な支援を集め、子どもが来やすい居場所とすること

※ どちらが良い、悪い、ということはありません。どちらも地域にとって必要な活動です。あくまで趣旨や方法の違いがあるだけです。

県内のこども食堂の概況(1/2)

『茨城県内こども食堂実態調査報告書』などより

団体数	少なくとも45以上
法人格	ボランティア団体：4割 NPO法人：3割 生協：1割
活動地域	県南：10（33%） 県央：10（22%） 県北：8（18%） 県西：8（18%） 鹿行：4（9%）
場 所	公民館など：6割 地域の店舗：2割 その他：2割
目 的	地域づくり：2割 生活困窮者支援：2割 居場所づくり：2割 食育：2割
開催頻度	毎月：8割 毎週：1割 2～3日に1度：1割
開催曜日	平日：7割 週末：3割
時間帯	夕食：7割 昼食：3割
対 象	子どものみ：5割 子ども以外も：5割
生活困窮の児童生徒の割合	1割未満：25% 2～3割：25% 9～10割：25%
こどもの人数	10人未満：3割 10～20人未満：3割 20人以上：4割
平均ボランティア数	5人未満：3割 5～10人未満：5割 10人以上：2割
財 源	助成金：3割 参加費：2割 会費：2割 寄付金：1割
こどもの参加費	無料：5割 100円：5割

県内のこども食堂の概況(2/2)

こども食堂を始めて良かったと思うこと

「不登校だった子が、学校に行けるようになったことなど、子どもたちの成長、変化が見られる」

「調理ボランティアなどを通じ、お母さんたちの居場所になっている」

「若い子育て世代と関わることで、シニア・ボランティアが刺激になる」

印象に残っているエピソード

「高校生が食器運びや配膳も積極的に協力してくれている」

「子どもの『美味しかった』に、シニア・ボランティアが泣きそうなほど喜んでいた」

「偏食のある4才の男の子が、初めてシチューを食べたと母親が喜んでいた」

「6～7kmをかけて、自転車で食べに来る子どもがいる」

「食材を提供してくれている近隣農家が、子どもたちに食の大切さの話を聞かせてくれた」

詳しくは＜ www.npocommons.org/data/kodomoshokudo-report.pdf ＞

学習支援活動も盛況

無料学習塾

団体名	学びと交流の秘密基地
活動場所	水戸市双葉台市民センター
概要	夏休みなどに行う無料学習支援と子どもの居場所づくり
対象	経済的理由などで学習に困難を抱える児童生徒
スタッフ	茨城大学の労働経済学を学ぶ学生
財源	助成金のみ



※ 生活困窮者自立支援制度による自治体からの受託事業として、NPOや社会福祉協議会が実施している例は少ない

その他の貧困に対する地域の取り組み事例

家庭の状況を話せない、理解してもらえない・・・



学校を不登校になりがち・・・



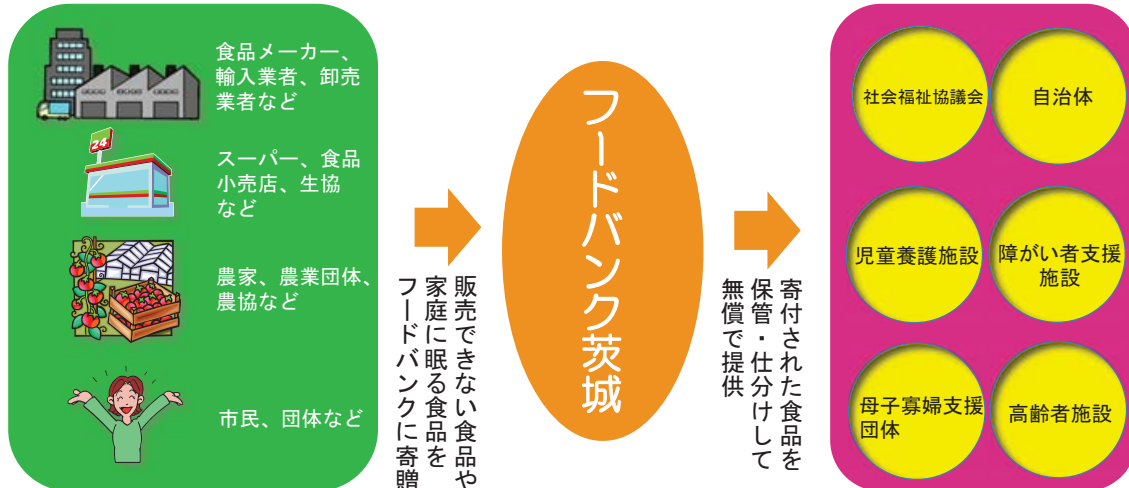
家でひきこもりになり、大人になってもあらゆることに自信がなく、社会との接点がない・・・

⇒就労支援や、中間的就労の取り組み
いばらき若者サポートステーション
グッジョブセンターみと



フードバンクとは？

安全に食べられるのに、箱のつぶれ、印字ミス、販売期間切れ、規格外など様々な理由で販売できない食品や農産物を企業や農業関係者から、また手をつけないまま家庭に眠っている食品を市民から寄贈してもらい、食品を必要としている施設や団体に無償で提供する活動です。



フードバンク茨城の食品取扱状況

区 分	主な食品提供先
生活困窮者支援組織	県内36市町村の社会福祉協議会、自治体
こども食堂、学習支援団体	NGO未来の子どもネットワーク、SMSC、居場所サポートクラブロベ、きらきらスペース、マナーズ
ひとり親世帯支援団体	各地域の母子寡婦福祉協会
児童養護施設、学童保育運営団体	茨城YMCA、茨城育成園、茨城県道心園、こどもの里、同仁会、窓愛園、市民支援センターともべ
障がい者福祉施設	O.K.factory、こもれび、心の和、くれよん、筑峯学園、フリーダム、らぽーる朋
薬物依存症者支援団体	KASHIMAアディクションサポートセンター、茨城依存症回復支援協会
高齢者福祉施設	新つくばホーム、うみべの家
路上生活者支援団体、外国人支援団体など	水戸キリストの教会、牛久の友の会



フードバンクのメリット

食に困っている人にとって

- ・ 食のセーフティネットが確保される！
- ・ 食の支援を通じて、様々な福祉機関とつながるきっかけに！
- ・ 福祉施設での食品関連経費削減によって、より質の高い福祉サービス提供が可能に！ など

企業にとって

- ・ 企業の廃棄処分経費の削減！
- ・ 食品ロス削減によって、従業員の就業意欲が向上！
- ・ 企業の社会的責任の向上！ など

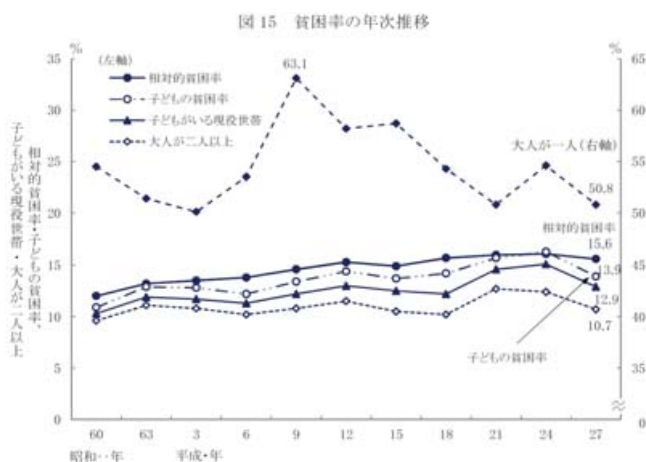
地域にとって

- ・ 食品ロス削減による環境負荷の軽減！ より持続可能な社会へ
- ・ 食を大切にする教育、文化を生み出せる！ など

生活困窮者が増加しています

地域	生活保護受給者数	人口割合	統計の時点
全国	210.4万人	1.7%	2018年4月
茨城県	27,860人	0.97%	2018年8月

※ 生活保護を受給できなくても、様々な理由で生活に困っている方は増えてきています。



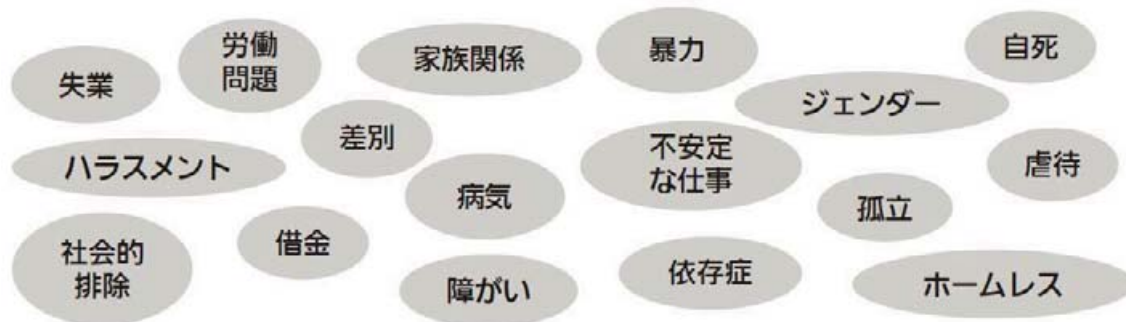
15.6% (6人に1人) が相対的貧困※ (OECD30か国中、下から4番目)

※ 国民の大多数よりも貧しい相対的貧困者の全人口に占める比率。平成24年の日本の貧困線は単身世帯で年間122万円 (平成25年国民生活基礎調査より)。それ以下が15.6%あるということで、所得格差がより拡大していることを示す。

子どもの貧困率: 13.9% (7人に1人) (2015年現在)

茨城県: 12.2% (約3,500人) (日本財団)

貧困の原因



貧困は、重層的な問題 ⇒ 貧困は「要因」でもあり、「結果」でもある

格差社会では、様々な理由が重なって、気が付けば生活困窮状態に陥っていることも…。

13

フードバンク茨城が支える生活困窮家庭の子ども (1/2)

- 「学校の音楽の時間のリコーダーが買えない…」
- 「体育の時間の体操服が買えない…」
- 「家庭科の時間の裁縫道具が買えない…」
- 「遠足や修学旅行に行くお金がない…」
⇒ 不登校、欠席になりがち。友達や学校からは、ズル休みと思われる
てしまう…。
- 学校の健康診断でメガネをつけるよう指導されるが、買うお金がない
⇒ 100円ショップで買った、母親が使っている老眼鏡をつけて学校に
行く ⇒ もちろん黒板の字は読めないまま…。
- 給食が一日で唯一の食事。夏休み、冬休みは、これらの子どもにとって
最もしんどい…。
⇒ 辛くて、コンビニでおにぎりを万引きする
⇒ 「あの子は不良少年」と思われてしまう…。
- 安い服を売っているリサイクル・ショップでも、下着は売っていない。外見
は「普通」だが、下着を着れない
⇒ 修学旅行に行くと、同級生と一緒に風呂に入るときにバレてしまう
⇒ 行きたくても、行けない。貧困を隠して、別の理由で休む…。

フードバンク茨城が支える生活困窮家庭の子ども (2/2)

- ・ 親はパート掛け持ちで、とても時間貧乏
⇒ 家の片づけはどうしても後回し
⇒ 家の中のゴミが腐って虫が出る
⇒ ゴミ屋敷状態・・・。
- ・ 母親がDVを受ける ⇒ 離婚裁判を申し立てるものの、暴力をふるう夫は住所不定で、裁判所からの通知が届かず、裁判が滞る ⇒ 暴力をふるう父親が、家にいつ来るかわからずドキドキ。家の鍵は父親に壊され、ドアを直すお金も、引っ越しするお金もない……。実はその父親も、生活困窮世帯でDVを受けた経験がある。貧困の連鎖が続いている・・・。
- ・ 生活保護を受給しようと市の生活保護窓口に行ったが、「所持金6,000円あるなら、申請は受け付けられません」と、「水際作戦」で断られる。「これって法律違反ですよ？」という問いにも、「はい、そうです」とだけ……。市役所までの交通費が、この世帯にとってどれだけ大きいものか。断られることによる絶望と行政不信、人間不信はいかほどのものか・・・。

全て県内で起きている現実です。これらは本当に、全て「自己責任」でしょうか。

常設型食品受取箱「きずなBOX」

フードドライブとは

家庭に眠る食品を集めて、生活困窮者支援に活用する「食の運動」。

ご寄付を希望する食品

缶詰、インスタント食品、レトルト食品など、未開封で賞味期限が2か月以上ある常温保存可能な食品。
※ 特におかずとしてすぐに食べられる食品を求めています！

きずなBOX

フードドライブ用の常設型の食品受取箱
設置個所：県内86か所（社協事務所、生協施設等）



フードバンクと連携しよう

- 家庭に眠る食品をきずなBOXへ！
- 地域行事でのフードドライブ実施
- 公民館などにきずなBOXを設置し、定期的に届ける
- 賞味期限が近づく防災備蓄品をご寄付
- お知り合いに口コミで紹介
- 自らの活動に、集めた食品を活用
- ボランティアとして活動参加（食品の配送、回収、仕分けなど）
- 会員として入会、またはご寄付

子ども食堂が申請できる助成金一覧

2018年7月18日現在
認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ

整理 番号	助成機関名	助成金名	助成コース	1件あたりの助 成上限	毎年の申 請期限	2017年7月 中旬現在 公募中	備考
1	社会福祉法人 茨城 県共同募金会	地域福祉特別助成	特別助成(A)	事業費の8割以 内で50万円以内	6月末		他にも、テーマ助成 などの助成枠もある
2	社会福祉法人 茨城 県社会福祉協議会	はんどちゃんネット ワーク運動サロン拡 充支援事業助成金		5万円程度?	8月末頃?		倍率は低め。これか ら募集要項が発表
3		茨城県ボランティア・ 市民活動推進事業 費助成金		50万円以内(2割 以上の自己負担 が必要)	5月中旬		
4	公益財団法人 公益 推進協会	JM基金		30万円	8月末	○	子ども食堂のための 助成金
5	一般財団法人 キ ュービーみらいたま ご財団		助成プログラムB:「食を通し た居場所づくり支援」	70万円	12月上旬		子ども食堂のための 助成金
6	大和ハウスグループ	エンドレス募金	支援テーマ枠	100万円	8月末	○	今年度のテーマは 「貧困の子どもたちへ 支援を行う活動」
7	NPO法人 モバイル・ コミュニケーション・ ファンド	ドコモ市民活動団体 助成事業	経済的困難を抱える子どもを 支援する活動	100万円	3月末		
8	公益財団法人 ベネッ セこども基金		経済的困難を抱える子どもた ちの学び支援活動助成	200万円	1月上旬		
9	福祉医療機構 (WAM)	子どもの未来応援基 金	未来応援ネットワーク事業	500万円	11月上旬		倍率は高め
10		社会福祉振興助成 事業	地域連携活動支援事業	50万円～700万 円	1月末		既存職員の人件費 不可。資金管理が大 変
11	生活協同組合 パル システム茨城	くらし活動助成基金	子育て応援部門 スタート部門(活動立ち上げ 資金) チャレンジ部門(事業・組織の 発展資金)	10万円(最長3 年) 20万円(最長3 年) 40万円(最長3 年)	7月末	○	倍率3倍くらい?
12	全日本社会貢献団 体機構	社会貢献活動支援 のための助成	子どもの健全育成支援		12月中旬		
13	公益財団法人 日本 生命財団		児童・少年の健全育成助成	60万円	11月末		常時・直接必要な物 品を助成
14	いばらき未来基金	花王・ハートポケット 倶楽部地域助成	いばらき未来基金の3つの テーマに沿った活動の基盤強 化。以下の2つのコースあり。 A. ネットワーク形成助成 B. 地域の居場所づくり助成	25万円	8月19日	○	コモンズの組織運営 支援が併せて付く。 昨年度はきらきらス ペースが助成を受け た
15	県内各自治体	協働事業提案制度 (または市民活動支 援補助金)	分野を問わない	龍ヶ崎市:100万 円	自治体によ って異なる が、年度 初めが多い		倍率低め。県内22の 市町村で実施

:特にオススメ

子ども食堂に関する参考文献一覧

2018年7月17日現在
作成: 認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ

整理番号	区分	発行	監修・作成協力	出版社	発行年月	文献名	ページ数	URL
1	参考書	NPO法人 豊島子どもWAKUWAKUネットワーク		明石書店	2016年8月	子ども食堂をつくろう！～人がつながる地域の居場所づくり～	196	
2	参考書	小林 じゅうたろう		水山産業出版部	2017年11月	だから、こども食堂	212	
3	参考書	飯沼 直樹		翔泳社	2018年1月	地域で愛される子ども食堂つくり方・続け方	160	
4	参考書	湯浅 誠		角川新書	2017年9月	「なんとかなる」子どもの貧困	248	
5	行政文書	内閣府			2014年8月	子供の貧困対策に関する大綱 ～全ての子供たちが夢と希望を持って成長していける社会の実現を目指して～	24	http://www8.cao.go.jp/kodomonohin/kon/pdf/taikou.pdf
6	行政文書	厚生労働省			2018年6月	子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について(通知)	24	https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000213463.pdf
7	行政文書	茨城県			2016年3月	茨城県子どもの貧困対策に関する計画	19	http://www.kids.pref.ibaraki.jp/~kids/kosodate/relatedplan/childpoverty/childpovertyplan.pdf
8	行政文書	茨城県 保健福祉部生活衛生課 食の安全対策室			2017年12月	子ども食堂の開設について	2	http://www.shoku.pref.ibaraki.jp/kanren_iigvosha/kodomoshokudou/pdf/about_kodomosyokudou.pdf
9	行政文書	茨城県 保健福祉部生活衛生課 食の安全対策室			2018年1月	子ども食堂を開設した(する)皆様へ(衛生管理マニュアル)	2	http://www.shoku.pref.ibaraki.jp/kanren_iigvosha/kodomoshokudou/pdf/forkodomosyokudou.pdf
10	手引き	農林水産省			2018年3月	子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集 ～地域との連携で食育の環が広がっています～	60	http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/set00zentai.pdf
11	手引き	京都市 子ども若者はぐくみ局 子ども若者未来部 子ども家庭支援課	NPO法人 山科醍醐こどものひろば		2018年3月	京都市子どもの居場所づくりのすゝめ ～のびのび 安心できる場所～	24	http://www.city.kyoto.lg.jp/hagukumi/page/0000235024.html
12	手引き	横浜市 こども青少年局 企画調整課			2018年3月	横浜で子ども食堂・地域食堂をつくろう！ガイドブック	19	http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/kikaku/chiiki-kodomo-ibasho/img/vokohama-kodomo-shokudo-guidebook.pdf
13	手引き	社会福祉法人 大分県社会福祉協議会			2017年1月	子どもたちの居場所づくり手引き ～子ども食堂を立ち上げるための必要なポイント～	30	http://www.oitakensyakyoku.jp/archive/s/877
14	手引き	社会福祉法人 新潟市社会福祉協議会	NPO法人 にいがた子育てステーション		2017年7月	子ども食堂をつくろう	18	http://www.svakyoku-niigatacity.or.jp/child/新潟市の子ども食堂
15	手引き	社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会			2017年3月	とよなか子ども食堂ハンドブック ～地域みんなで子どもの未来を応援するために～	8	https://www.city.toyonaka.osaka.jp/kosodate/kosodate/kodomomirai/ibasho.files/2017kodomoshokudouhandobukku.pdf
16	手引き	「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会			2016年9月	「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー公式パンフレット	8	http://kodomoshokudo-tour.jp/pamphlet/kodomoshokudo_tour_pamphlet.pdf
17	調査報告	公益財団法人 日本財団	三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社		2015年12月	子どもの貧困の社会的損失推計		https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/ending_child_poverty/
18	調査報告	「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー in 茨城」実行委員会			2017年2月	茨城県内こども食堂実態調査報告書	13	http://www.npocommons.org/data/kodomoshokudo-report.pdf
19	調査報告	茨城大学、茨城県生活協同組合連合会、認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ			2018年3月	茨城県内のこども食堂マップ	1	http://www.npocommons.org/data/kodomoshokudo-map.pdf
20	調査報告	静岡市子ども食堂ネットワーク			2016年	静岡市協働パイロット事業「子ども食堂」実態調査 報告書	50	http://www.city.shizuoka.jp/000755041.pdf
21	調査報告	NPO法人 フードバンク福岡			2017年5月	子ども食堂ヒアリング調査報告書	7	https://www.fbfukuoka.net/doc/report/子ども食堂ヒアリング調査報告書.pdf
22	調査報告	明坂弥香、伊藤由樹子、大竹文雄			2017年4月	日本の子どもの貧困分析	38	http://www.esri.go.jp/jp/archive/e-dis/e-dis337/e-dis337.pdf
23	調査報告	子供の貧困対策に関する有識者会議			2017年8月	子供の貧困に関する指標の推移	23	http://www8.cao.go.jp/kodomonohin/kon/yuushikisya/k4/pdf/s1.pdf
24	論文	柏木 智子			2017年12月	『立命館産業社会論集』第53巻第3号 「子ども食堂」を通じて醸成されるつながりの意義と今後の課題 ―困難を抱える子どもの参加と促進条件に焦点をあてて―	21	http://www.ritsumeai.ac.jp/file.jsp?id=367118
25	論文	吉田 祐一郎			2016年9月	『四天王寺大学紀要』第62号「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察 ―地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて―」	14	http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/wp-content/uploads/2016/10/kivou62-20.pdf

公益社団法人茨城県地方自治研究センター役員・研究員体制

理 事 長	鈴木博久（代表理事）	監 事	清水 瑞 祥
副 理 事 長	黒 江 正 臣	監 事	飯 田 正 美
副 理 事 長	帯 刀 治	研 究 員	岡 野 孝 男
専 務 理 事	千 歳 益 彦	研 究 員	柴 山 章
理 事	堀 良 通	研 究 員	菅 谷 毅
理 事	佐 川 泰 弘	研 究 員	大 高 み よ
理 事	菊 池 正 則	研 究 員	有 賀 絵 理
理 事	石 松 俊 雄	研 究 員	本 田 佳 行
理 事	今 井 路 江	研 究 員	横 田 能 洋



湯浅誠さんの講演は、茨城県労働者福祉協議会が主催した「2018年度勤労者福祉研究集会」で行われたものです。当センターも後援させていただいたことから掲載のお願いをしたものです。

自治権いばらき

No.132 2019年3月15日発行

発 行 所	公益社団法人 茨城県地方自治研究センター 水戸市桜川2-3-30 自治労会館内 TEL 029-224-0206
編集・発行人	鈴木博久
印 刷	コトブキ印刷株式会社 水戸市千波町2398-1 TEL 029-241-1000